

栗太志

十八十九
二十

五
止

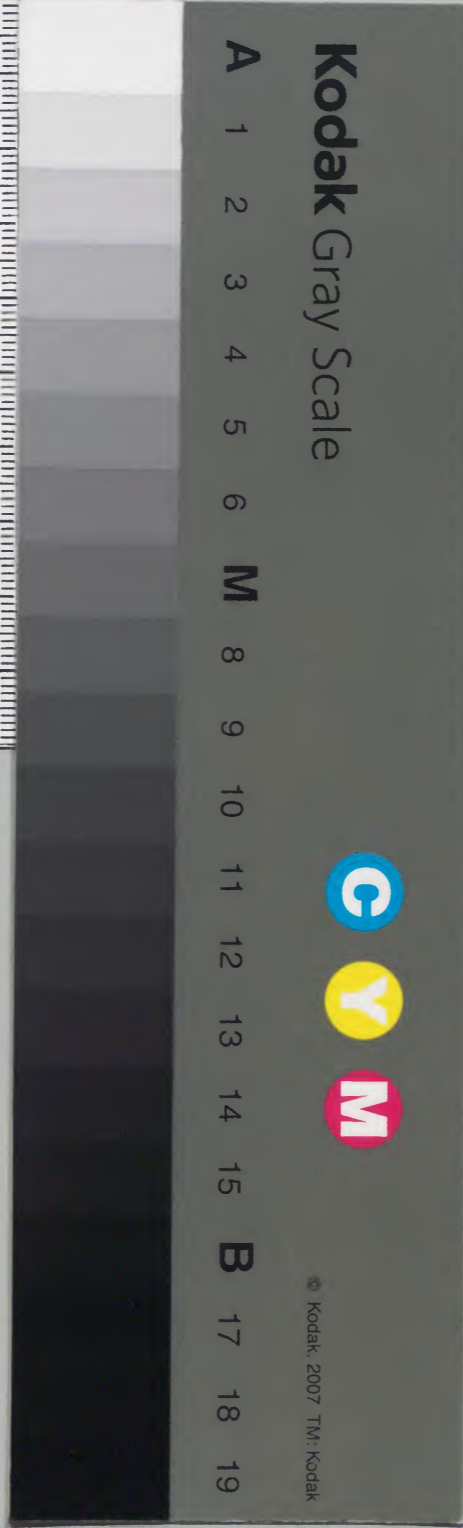
和書門	三六四	一八	一	五
類	號	函	集	冊

和書	三六四	一八	一	五
類	號	冊	架	函

内閣文庫	番號	和	36461
	冊數	5	(5)
	函號	174	172

地四一

共五



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



栗太郡志卷之十八

柳津田中貞昭編



田上郷

一書云谷上郷

日本紀雄略天皇十一年夏五月辛亥朔

近江國栗太郡言白鷗鷄居于谷上濱因詔置川瀬舍人云々

牧庄

日本紀天智天皇七年秋七月近江國多置牧而放馬

近江朝廷時馬ヲヤシナフ地ナリ其他國中ノ處々ニ牧ト云村多シ皆當
時馬ヲヤシナフ地ナルヘシ

牧村

中野村

芝原村
新免村
平野村
桐生村

金勝寺ヨリ 禁裏諸御所江獻上ノ御香水持歩人足ハ牧村。
平野。桐生。ノ三ヶ村ヨリ勤ル也。コレハ三ヶ村ノ民常ニ金勝寺領ノ山ニ
立入りテ爲樵スルカ故ナリ

中^{ナカ} 杣^ノ庄^{シラ}
里^{サト} 枝^エ村^{ムラ}

石^{イシ}居^ス村^{ムラ}

森^{モリ} 羽^ハ栗^ノ村^{ムラ}
堂^{ドウ} 村^{ムラ}

是^{コノ}世^ヨ村^{ムラ}記云今民居ナシ。五ヶ村ノ

田畑ハワリ入テ其地ヲ知
ルモノモ今ハ亡シト云々

今^{イマ}村^{ムラ} 羽栗村。森村。枝村。三ヶ村ノ
野先ニテ荒地ナリシヲ寛
永ノ比里村ノ人。開墾シテ
今村新田ト号ト云其後慶

安三年森村領ノ内開墾之
于新田ト号クト云

牧ノ庄中杣ノ庄共ニ田上郷也

森村
林

牧村

公封内

村高四百四十五石一斗一升

八幡神社

土俗曰八幡大菩薩ノ木像アリト云

稻荷小祠

是モ同ク木像アリト云

山神森

大將軍森

真光寺

元享元辛酉年 開基正圓

菖蒲堂

本尊阿弥陀如来

地藏堂 菖蒲堂境内ニ在

大戸滝 高廿七尺許 滝壺深廿六丈餘

當村ト大鳥井村トノ間ニ在リ其流レヲ大戸

川ト云又俗ニ田上川ト云モ是ナリ末ハ黒津

村ヨリ勢多川ニ入ルナリ古ハ田上川ト云フ

ハ勢多川ノ黒津邊ヲ云フナリ網代ノ古歌ハ

皆勢多川ノナリナリナリナリ

新免村

公封内

村高百九十四石四斗四升四合

新宮神祠 鎮座年代不知

神事三月二、午日

十禪師権現祠

山神

神事正月十二月寅日夜祭之ト云

古城跡

何人ノ居城ナルヤ知ルヘカラス其地ヲ城ガ

岳ト云

外内坂

當村ト芝原村ノ間ナリ

古記曰土俗源内坂ト呼ハ非ナリト

按ニ新免村芝原村接壤ノ処ナリ但芝原大萱

山村境ナル処ニ土俗源内峠ト稱スル処アリ

佛光寺末西性寺近比マテ道場ト云

公封内

中野村

村高四百六十八石二斗九升

荒戸神社

寛文四辰年炎上

元文三年午再興

太子祠

若宮八幡祠

安永五申年八月朔日

此境内ニ勧請

山神

皆境内ニ在

鎮座年代不知

牛頭天王社

鎮座年代不知

牛頭天王社

寛文四辰年炎上 元文三午年再興也

攝社

神明 惠比須 不動 祠廢シテ趾ノミナリ

中野 足原 牧 平野 同願祭祀也

寶物 書寫 大般若經六百卷

荒戸社領御寄附田貳段五畝歩

佛光寺末 常念寺

開基不知

同上 法藏寺

開基不知

家隆渡

大戸川荒戸神祠ノ川上三四町許リ上ノワタリ場ヲ云

家隆松

宮山ノ峯ニ在リ

記曰相傳フ古昔家隆卿ノ愛セラレシ松ナリト云家隆ハ 前中納言太

宰権師光隆ノ二男ナリ壬生ノ二位宮内卿ト号ス母ハ大皇后虎

實弟朝臣ノ女ナリ新古今ノ撰者五人ノ其一人ナリ家隆此地ニ遊

シテ未タ見アタラズ後ノ識者ヲ俟ノモ貞昭 按ニ金勝山大菩提寺ハ

宗院ニライテ一切経論ヲ書寫シ國家鎮護ルタメニ近江國中ノ諸社

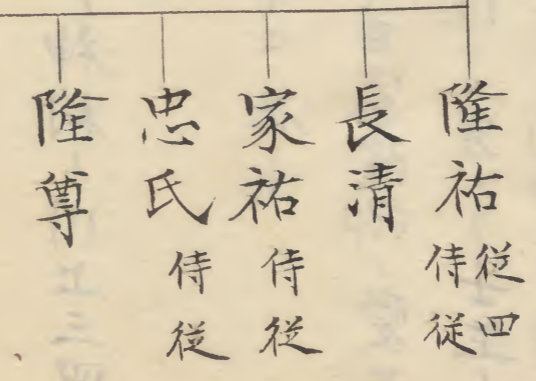
ニ納メラルコトアリ家隆卿ノ五男隆尊師 按ニ元ハ三井寺ノ僧ナリ 彼ハ宗院ニテ

イテ書寫ノ其一人ナリ今モ山田天神社并南山田若松社大般若

若経奥書ニ佛子隆尊トアリ其年ヨウヲ閱スルニ建長正嘉嘉文

應弘長ナリ故ヲ以テ金勝山ニ往スルコト久シキヲ知ル。推量スル家
 隆卿父子ノ故ヲ以テシバ、金勝山ヲ訪ハルナルヘシ而シテ此地ハ京
 師ヨリ金勝山ニ往来スルノ路次ナリ故ニ大戸川ニ家隆ノ渡シ
 名土俗ノ口碑ニノコリ。斯ニ家隆ノ松ト云ヒ傳フルモ虚名ニテハア
 ラサルヘシ古ヲ考フルニ記録ヨリハ口碑ナリ。因ニ家隆卿系譜。
 大系圖ヲ摘出シテ左ニ載ス

家隆



慈隆 律師

皆家隆卿ノ子ナリ

法藏禪寺舊趾

其跡田地ト成ル即今芝原村ニ在リ

御陵

其形象山陵ノ如シ土俗是ヲミサ、キ山ト云
 ノ何人ノ塚ナルヤ考ハ得ズ後ノ君子ヲ俟ツ

尊氏僑居趾

今其跡河ト成ル土俗相傳テ楠正行ニ逐ハレ。散々ニ敗北シテ此地ニ暫ク僑居スト云々

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

平野村

公封内

村高四百十二石一斗三升

天満天神祠 拜殿 宝藏 鳥居

西光寺 佛光寺末

永禄九丙寅年 住持了教

正源寺 同上

天正十六戊子年住持樂壽

地藏堂 石像也

芝原村

公封内

村高百七十三石六斗二升

鎮座年代不知
波尾神社

烏尾川、上ニ在リ是則荒戸神社ノ神幸ノ地ナリ

佛光寺末
福圓寺

永祿七甲子年開基法祐

禪宗
正覺山法藏禪寺

文明年中當所住人中野備前守宗永男加賀守
宗成與青松秀禪師相議所開創也其地在牧庄
荒戸明神正西桐山上破壊終湮滅ス

元禄五年壬申五月中野村ニ移シテ再建ス
寶永七年七月十七日田上川洪水中野村芝原
村同ク為水路故移西村於今處
寶永八年五月移寺於新芝原村波尾明神ノ東
北太平山三建立即今法藏禪寺是也縁起略之
具要、摘出スル者也

桐生村

平野村東北三リ四隣相隔ツル南平野村へ半里餘東大
鳥居村へ二里。西馬場村へ一里。真三孤村ナリ金勝寺古岡ヲ以テ
考ルニ桐生嶽ノ麓ナレハ村名トナリタルナラン

公封内

村高二百八十一石三斗九升三合

矢野神社

所齋祀天兒屋根命

貞治三甲辰年炎上 同乙巳年造營

神事正月十三日 九月十三日

七鍋之事

神事正月十三日一村雜煮ヲ以テ客ヲ饗養ス朝ヨリ夕ニ至ル故
幾鍋モ煮ルニ依テ七鍋ト申傳ト村翁ノ口實ナリ

攝社

八幡祠

正休寺東本願寺末

慶長年中

釋善正開基

萬治二年己亥始テ正休寺ト号ス云々

池

土人呼テニタロウト云

此池享保年中此村ノ農民某造之ト云常ニ水涌出テ其下。
川ト成ル旱魃ノ年ト虽モ涸渴スルコトナシ。此村。近年田地次第
開墾シ民家富饒ナルハ此池アルニ因テナリ宜哉古昔造池使テ

ツテ政事ノ具一ナルヲ希クハ邑宰村長ノ者造池或ハ修理
ノコト農事最大ノ政務ナリ之ヲ忽セニスベカラス

川尻肥前守一家者織田信長公ノ家臣也其曾孫川尻源左衛門
正永浪人シテ東本願寺ニ客食ス其後裔貞享三年丙寅移往
此村。農民ト成ル。其子孫相續シテ即今川尻源ハト云。元來大家ノ
後ハレハ古文書古畫武器等所持之由。毎年六月庚午有之或歳
朋友相携。川尻氏ヲ訪ヒ。虫干一見ノ内一二ヲ左ニ録ス

大相國秀忠公御書翰

織田信長公御教書

豊臣秀次公御教書

福島正則書翰

本願寺教如上人書翰

石川丈山書翰

其他當時將家之書狀數通有之

徽宗皇帝画一幅其圖梅鳥

其他數幅アレトモ録スルニ不足

古面一ツ

按ニ樂ノ面ナルベシ

武器

主人云先代流浪ノ間ニ多クハ失亡ス今存スルモノ録スルニ不足

本願寺ヨリ贈ラレタル月形ノ香臺アリ

又桐生村住居ノ後本願寺ヨリ贈ラレタル本尊アリ其圖

九字

親鸞像

如是一幅トス則川尻氏ハ

弥陀像

今ニ東本願寺旦那也

十字

川尻氏系譜ヲ摘出シテ左ニ記ス

祖先ヨリ十一代略之

一家オホエ川尻與兵衛任肥前守。川尻永俊之子也。嗣父之職邑。任平

信長公。小豆坂之役。一家亦在行伍。擒義元之銳卒。即田原某。且

獲首級。時年十六也。永祿三年五月十九日。信長公與義元大戰於

尾州之熱田旗屋口。一家戰功甚多。同九年八月廿日。攻大河内城。使

菅谷中川木下。松岡。川尻。等警衛圍壘。翌日遂拔城。依其功被

改一家兵衛尉。同十年公。選孝母衣兵二十人。一家亦在其列。所謂黑母衣也。姉川之役。公使磯野丹波守。攻佐和山城郭。一家守彦根山。公征長篠之日。賜兜鍪於一家。且使一家屬信忠公之軍。公囑信忠曰。三軍之進退。須任一家之指揮。云々公任右丞相之時。授官爵於忠勲之臣一家亦預其任肥前守。天正二甲戌年。公自討賊于勢州長島。一家在麾下。獨身搏擊。殊得首級。凱旋之后。教一家為濃州岩村城主。公征伐武田氏。軍信州。伊奈城主下條伊豆守拒之。用一家之謀。率伊奈城武田道遙軒。日向玄德齋。在大島城。察其勢之難恃。去城退兵。公使毛利河內守一家護大島城。同國高遠之城。仁科五郎小山田備中守據烏。公圍之。森勝藏團平八毛利河內守一家

家等。夜中潛軍渡河。到城門各自力戰。急擊。遂陷城。三軍益競入。甲府城邑悉潰。勝頼微行。避田野。使龍川伊豫守一家等。帥兵急攻田野。屠武田一族。無噍類。時天文十年三月十日也。自後公賜優賞于諸臣。與甲陽郡名關名信州。諏訪二郡於一家。

慶長四年三月 東照大神君。放鷹馬于攝州茨木。一家敬而迎神。居於城中。且獻盃酒。一家茨木城主故也。佐々淡路守。堀田若狹守。織田有樂。細川幽齋。有馬法印。金森法印。青木法印。道阿弥。江雪。半入。等供奉烏一家。悉鄉食之。慶長五年二月廿五日。一家以病卒。享年七十五。

永次 川尻久衛門永次幼弱之故。不能襲爵秩。終流落民間。昔在

本願寺教如上人據難波城。信長公攻之。父一家在軍中密
通策城中。為救。教如一家貴浮屠之則致也。永次潦倒京師。
教如上人。以有父一家之恩。紹介千利休。招之。使屬本願寺
後薙髮號頓乘

一永 川尻市藏

一國 川尻久右衛門

正永 川尻源左衛門嗣父一國。仕東泰院宣如上人。後有故致仕略

貞享三丙寅年移住于當國。略

里村 石居村

古名神里村源俊賴卿家集ノ辭書云田上ニ侍ル比。神ノ

里トイヒケル所ニアリ神里ヲ略シテ里村ト呼ナルヘシ

公封内

村高八百十三石五斗四升八合

毛知比神社

一名餅津大明神
神殿二座 拜殿

日本武命 保食命

二神所齋祀也勢多武部神社ノ別社也

武部社紀云天平宝字元年三月有神勅於田上杣郷創建

別宮同二年三月遷座郷人等為神供奉餅依號餅宮蓋

以日本武命保食命二神併祭之云々

今本地佛馬頭觀音ト云是ハ釋最澄以後ノ弊ナルヘシ

撰社

十禪師推現

三十番神

神事 三月亥日神立祠へ神幸ニテ午日御歸社

御領主

御寄附社領高三石九斗 田三段歩也

記曰餅津大明神往古ハ大社ニテ。五十四箇村 神事ニ預ルナリ
御旅所ヲ神立大明神ト云所謂五十四箇村トハ田上郷十八ヶ村
大石郷五ヶ村。青地庄十五ヶ村田原郷十八ヶ村ナリ今ハ総ニ里
村ガリノ神事トナレリ今里村ノ田地ノ字ニ。神殿。市殿。舞臺。神本。

幣本。連歌田。琵琶田。ナトイフアリ是等皆古大社ノ時代ノ舊跡
ナリト云々

俊頼家集云

田上ニ侍ケル此。神ノ里トイヒケル所ニ湯ワカシテ人ノ迎ヘケレハ。マカ
リケルニ。鳥居ノ在ケル前ニ道シルヘノ者ニ。ヨリロシケレハ。イカヒ
神ノオハシマス。尋ケレハ。モ千ヒノ宮ト申神ノオハシマス。ト云ヲ
聞テ俊重カタハムレテ申ケル

アレユハ餅ノ宮ト聞カラニツクノト思フ事ヲコソ祈レ
ト云ヲ聞テ和シ侍リケリ

俊頼

アレトミハサシテソレトモマイラマシ。ヨソニモ千ヒノ宮仕ヘシテ

神立神祠

明德四癸酉年再建 餅津神社神幸ノ地ナリ

山神 字堂ヶ谷

山神

野神塚

村中ニ在リ按ニ古塚ナルヘシ

浄土宗知恩院末 福壽山善往院西方寺

元龜二辛未年 開基繁譽上人

元祿十二年己卯十二月

御領主御墨印

右者 御一族

善往院殿 隆崇院殿 御両靈

御法事料 御寄附 高六斗三升九合

東本願寺末 西運寺

開基不知

福壽寺舊跡

堂カ谷ニ在リ是往古ハ大伽藍ニテ中杜庄六ヶ村ヲ領セシ由土俗ノ口

碑ニノコレリ

古城趾

今ニ壘溝ノ跡殘レリ

記曰是多羅尾道可ノ城趾ナリ。道可者俗名多羅尾四郎兵衛光敏ト号ス。近衛殿ノ庶流ナリ。六角家ノ旗下ニテ。當所及信樂邊ヲ領シタル勇士也。淺井

長政、妻八道可、娘也。明智光秀織田信長ヲ生害ノ時、大神君塚ヨリ
信樂越ノ時、御道知ルヘシハ此道可也。

東本願寺宗宗金福寺末令八栗栗願寺ホ
恩教寺 教令ハ敬ニ作ル 石居村ニ在リ石居一村ノ寺也

延宝九年辛酉九月開基

地藏堂

石居村 織多村ナリ

元里村ノ内ナレトモ近年 享保年中 別ノ村トナレリ在ガイケン原寺ノ舊礎レ故

ニ所ノ名トス

在ガイケン原寺舊跡

石居村ニ在リ往古ハ此村悉皆在ガイケン原寺堺内ナリ今ニ礎ノコレリ此邊地ヲ堀

レハ佛具ノ朽タルヲ得ルナリ

枝村

公封内

村高二百九十三石三斗八升

鎮座年代不知
天満天神祠

記曰佐々木氏建立ナリト何レノ代ナリヤ知ラズ

撰社

荒神祠

山王小祠

山神

庄塚 或ハ野神塚ト云

按ニ中杣庄。牧庄。疆界ナルヘシ

淨土宗阿彌陀寺末
不退山安樂寺

土俗傳へ謂ふ往古中松普禪寺ト云寺有リシカ今廢ス今此寺ノ樂師如
末。并ニ四天王ハ普禪寺ヨリ移スト云

岩窟

此村ノ山中ニ處々ニ有リ土俗ハ塚穴ト云フ記曰大岩ヲタミテ中ヲ深クシ土俗云
古ハ火ノ雨降シトキ隱レタル處ナリト火ノ雨ト云ハヒサメノヲテ大雨ノ文字ニテ
長雨ナリ日本書紀ニ大雨ノ文字ヲヒサメト訓ス印行ノ日本紀ニ火雨ト書ハ筆畫
似タルヲ以テ大ノ字ヲ誤ルモノナリ一説ニヒサメトハ氷雨ナリト云。或ハ上古穴居ノ跡
ナリト云。鎌倉ナトニ谷ト云所多シ。是皆岩窟ナリト云々。按ニ郡中ノ所々岩窟
至テ多シ其制種々ニシテ同カラス實ニ人ノ住居シタルヤウニ作りタルアリ然レトモ其
中或ハ其傍ヨリ掘得タル物ヲ往見ルニ葬具ニ似タル陶器古鏡鈎玉ノ類金環等

ナリ龍溪先生曰何レノ國ニテモ土俗岩窟ヲ指シテ塚穴ト云俗間ノ口碑ニ殘リタル
モノ證トスルニ足ルモノ多シ實ニ人ヲ葬リタル處ナルヘシト是確説ナリ余実物ヲ
視テ弥信スル所ナリ然レトモ上古穴居櫟住ノヲ又禮記王制ニ穴居ノヲヲ載ス
皇國及ヒ西土ノ載藉ニ曆然タリ。巳ニ日ノ神以鏡入其石窟或出天磐戸ノ語ヲ
熟思スルニ常ニ岩窟ニ居住シ玉フヤウニ思ハルナリ吾友水口蓮華寺義應師
有ニ塚穴之説左ニ記ス

塚穴之説

諸國ニ塚穴ト稱スルモノ上古穴居ノ遺跡又ハ火雨ヲ凌ク為ト云ヒ或ハ恙虫ナトノ
説マキノナリ余壯年ノ此ヨリ所々ニテ是ヲ見ルニ何レモ廣サ方ニ間或ハ方ニ間半ミ
アルベシ。一年伊勢ニ詣テ、天ノ岩戸ナル處ニ至ルマシク塚穴也土人ニ問フニケ様ノ所此
山中ニ所々ニ在リト答フ。按ニ後世巫祝等遺鄙ノ參宮人ヲ欺テ鵝目ヲ賣ルル

ヘシ其北伊勢三重郡日野村ト云所ニイタリシニ其北家作ノ為ニエラ堀取ント
山ヲ環シカナル穴ハ堀中テタリ土人ト驚驚先ツ領桑名侯へ訴フ近郷群集
セリ余幸ニ是ヲ見ルニ入口ニテハ方二間許其奥ニ復穴アリ茶室ノ通ヒ口ノ如ク
方三尺許内ハ這入レハ廣サ方三間許モアルヘシマヤシク諸方ノ石窟同制ナリ石ナキ
所ニエラノミ堀穿テリ又四五年前當國甲賀郡中畑村ニモ此ノ如キ穴ヲ堀中
テタリ皆同制ナリ數千年ノ間多地震ニ崩レサルハ奇ナリ去ル天明三年卯
十二月伊州若松村幸太夫磯吉等魯西亞國へ漂流シ十二年ヲ経テ寛
政五年丑八月ニ歸國セリ予幸ニ出會ニテ蠻夷ノ風土ヲ尋シ最初漂
着セシ地ハ奥蝦夷ノ隣島アミシイカト云島ナリ其地ノ人モ穴居ス本邦ニ
アル所ノ石窟ニ聊カタカハスト云リ按ニ世界ハ西ヨリ開ケシト聞ケハ彼地ハ東隅
ナルニ上古ノ風俗ノコリシマ有巢氏世未有宮室冬則營窟ニ夏則居櫓

巢未有火食草木之實鳥獸之肉飲血茹毛

日本紀曰日ノ神出天磐戸此時以鏡入其石窟者觸戸小瑕其瑕於今猶存ニ
此即伊勢崇秘之太神也

世紀曰天ノ日別命多賀佐山作石宅居ス

景行帝時武内宿禰自東國還之奏言東夷中有高見國其國人
男女推結文身為人勇悍是ヲ按テ曰蝦夷亦土地波攘而曠男女交居
父子別冬則宿穴夏則住櫓衣毛食毛飲血矣此等ヲ案ルニ穴居ノ跡ナル
ヲ歷然タリ中略此間西ユノ上古穴居ノ故事ヲ引レタリ人知ル所ナレハ略ス

神武天皇ノ詔ニモ巢ニ棲穴ニ
住習俗惟常ナレトアレハ人皇ニ至テモ夷俗ハカリニ非ス邦畿ノ賤民ハ猶
穴居セント見ヘタリ損軒翁云曾テ多ノ國々ヲ経歴セシニ都邑ニ遠キ所ノ
山傍或村邊ニ石ヲ三方ニ疊テ穴トシ上ニ大石ヲ並テ覆ヒ皆南方ニ入口ヲヒラ

ケリ其穴ノ中恰モ今ノ堂室ノヘタテアル如ク二三處トシ。口ノ間アリ中ノ間
アリ奥ノ間アリ。君臣父子ノ居處サナガライキシルシ。ケ様ノ所。甚多シ
河内國生駒ヶ嶽ノ下服部川ノ千塚又大和國山邊郡ノ千塚ナト皆是
ナリ一年國君ノ命ニ依テ筑前國ノ千村萬落残ラス経廻セシニ國中ニ石
窟幾千百ト云数ヲ不知村ニヨリテ十區。二十余區モコレアリ或ハ村民塚
築キ水門ヲ開又ハ居宅ノ用ニ其石ヲ取用ヒテ塔キタル所多シト虫モ猶ノ
コレル所。斯ノ如ク多シ其口皆南ニ向タレハ陽ニ向ヒ寒氣ヲサクルノ備ナラン
是皆古ヘノ穴居セシ址ナルヘシ。斯ク高儒ノ考ヘモアレハ。イヨノ穴居ノ
跡ナルヘシト思ヒシニ巖垣先生ノ考ニハ穴居ノ遺跡ニテハナク。塚穴ト申ス名
目モ至テ古キヲナレハ古ヘ死者ヲ葬シ石窟ナルヘシト聞テ不審キニ日北
勢ノ小松村ト云所ニ行シ時先年日野村工穴ノ話ニ至テ村人云此村ニモ石窟

有リスヘテ此邊ニハ石至テ少キニ彼穴ハ大石ニテ置タリト云ヘリ依テ案内
ヲ乞ヒ往テ見シニ豎八九尺横四五尺許三方一枚石ニテ寄セ合セタリ前ノ戸
石ノ村ノ寺院ノ普請ニ取り用ヒシトテ今ハ亡シ其内ヲ見ルニ狭小ニテ中々
人ノ棲違スヘキモノニ非ス是ニ依テ彼龍溪先生ノ塚穴ノ考ヲ思ヒ當レリ
ニ里ヲ隔テ長沢村ト云所ニモ。日本武尊ノ陵ナリト云モノアリ又其地ニ至リ
見シニ小松村ノ石窟同制ナレ氏中古石ヲ取タルニマ遺石聊カミエタリ。享保ノ
比。田栄似ナル者。是則チ尊ノ陵ニ決セリトテ領主龜山侯江訶ヘツレヨリ
例祭ナト取立シトナリ又一里半許隔テ庄野馭ノ西。高宮村ト云所ニ日本
武尊ノ御笠ヲ埋ミシ所トテ笠殿ト稱シ近年殊ノ外繁昌シ。例月八日近
郷群參ス其少シク西ニ尊ノ陵ト云傳ヘテ。宮車ニ象ルモノアリ茶白山ト云
コレ實ノ尊ノ山陵ナルヘシ

景行天皇勅言此山陵則朕愛子ノ所居天下泰平之墳墓也其制輕小而不合朕意今將増造之高大而可比天皇山陵云々之由テコレヲ觀レハ長沢村ニアルハ恐クハ他人ノ墓ナルヘキカ又改葬シテカクニケ所ニアルカサレハ龍溪先生塚穴ノ考モ當レルニ似タリサレトモ塚穴ト穴居ト分アルヘシ今混雜シテ一定シカクシ土地ノ便ト穴ノ廣狹トニヨリテ分ツヘキカ尚諸君子ノ高考ヲ俟ツト

貞昭追テ考ルニ吾近村開発ノ為ニ林中或ハ田地中ニ里堡ノ如キモノヲ墜キ取ルト往々コレ有リ行テコレヲ見ルニ決シテ其中央ニ大石ヲ圍ミ大石ヲ以テ覆フタリ具種々ノ陶器アリ是葬開字キノ器ナリ然ルトキハ死者ヲ埋葬セシテ必セリ矣又山腹或阜岡ノ高キ所ニ南方ニ入口ヲ開キ頂上ニ明リヲ抱ク穴ナト穿キ或ハ其穴中ニ堂室ノ別キナトアルハ穴居ナルト必キ矣然レトモ古ハ墓塚モ

多ク阜岡ニ構ヘ南面ニ隧道ヲ穿キ夕レハ口ハ皆南向ナリ又合葬ニヨリテハ堂室ノ別キノ如ク構ヘタルモ有リ和州。河州。ナトノ高貴ノ陵墓ニテ知ルヘシサレハ一概ニ穴居ノ蹤トモ云ヘカラス

天台宗三井圓滿院殿御法流成就院不動寺

田上ニテトウ人モナキ旅ノイブセ
カリケルニ都ノ人ウラメシカリケレハ

源俊賴

問ヘカシナ霧間ヲ分テ神山ノ木ニケキ
谷ノ下ノ朽葉ヲ

或人云此歌ニ神山ト云フ即チ太神山ノトナリ。太神山ヲ訓シテ。夕ノカミヤマト云フ伊勢太神ノ影向ノ山ト云フハ後ノ説ナリ

清和天皇御宇

智證大師開基也

寺領二十石七斗六升九合

森村ニ在リ

山ヲ号テ太神山ト云フ。勢多ヨリ入テ里村ヨリ登ルヲ本道トス。

是則チ信樂ヨリ京ヘエルノ街道ナリ又野路ヨリ入テ中野村ヨリ

登ル道アリ毎年正月八月二十日ヨリ二十八日マテ寺僧修護摩

參詣群集ス。鹽ヲ苞ニシテ之ヲ供ス

緣起曰釋智證園城寺ヲ造営セント欲シ良材ヲ此山ニ求ム。峰頭紫雲

クナヒキ夜々金色ノ光ヲ現ス智證奇異ナリトシテ遠ク羊腸ヲ攀ルニ老

翁ノ石上ニ座セルニ逢フ翁曰天照太神。日々此石及此樹ニ來臨シ玉フ故ニ我

常ニ是ヲ守ル。相共ニ此樹ヲ截リ佛像ヲ彫刻セント智證許諾ス時ニ空中ヨ

リ不動明王顯レ願ハ我容ヲ作レ。智證翁ト俱ニ尊容ヲ模作ス。功成テ

後翁亦智證ニ告曰我ハ是天照太神ナリト言畢テ見ヘス。智證雲中ヲ

拜ニ模作ノ尊像ヲ巖窟ニウツシ伽藍ヲ建立シ山ヲ太神山ト号シ寺ヲ

成就院不動寺ト号スト云々

按ニ此緣起後人ノ偽作ナルヘシ。如何トナレハ奇異多シテ實事少シ

影向石

不動寺巽隅六町許ニ在リ土俗天照太神影向ノ石ナリト云フ

烏帽子岩

太神山ニ在リ其形象。烏帽子ニ似タリ故ニ号ク

御領主

御寄附高十八石 一曰十石

入梅池

太神山不動寺石階ノ下可許奥ニ在リ。凡長五間廣三間許ナリ其号
クル故ヲ不知。按ニ此池往古ハ入梅中ニ自然ト水ノ干満アリ或ケ様ノ類
往々コレ有リ就中。摂津國矢田郡山田原野村入梅左衛門今利左衛門云
後園ニ自然ニ穴ヲ穿テ水ヲ生ス。其水生ル日入梅トシ水ノ止ル日ヲ出梅ト
ス則其家ヨリ正保四丁亥年入梅出梅ヲ書付

公儀江差上シトナリ左ニ記ス

甲乙歳ハ 五月節ニ入テ二ノ壬ノ日入梅

十一ケ日ノ間ナリ

丙丁歳ハ 甲ノ日入梅

七ケ日ノ間ナリ

戊己歳ハ 同 庚ノ日入梅

十四ケ日ノ間ナリ

庚辛歳ハ 同 戊ノ日入梅

九ケ日ノ間ナリ

壬癸歳ハ 同 丙ノ日入梅

廿一ケ日ノ間ナリ

其他所々ニ入梅中水ヲ生スルコアレハツノ類ヒナランカ

記曰此池邊入梅ノ此樹木ノ枝頭ニ水珠ヲ生ス。其色青白形象圓ニシテ周
圍一尺或ハ二尺許。此池ノミニ限ラス。此邊山間ノ池邊皆斯ノ如シ。土俗云フ
水珠ノ中蠶兒有テ梅雨アクノ日ハ。此水珠自ラ地ニ落ち。ヒラケテ蠶兒出
ルト云余往テコレ見ルニ四五月此枝頭或ハ中ニ泡ノ凝集リテ周圍五六寸
許ナルモノアリ 至テハキハ所々ニアリ 其泡ノ中ヲ窺ヒ見ルニ黒キ小虫集リ居レリ按ニ虫ノ

巢ナルヘシ又按昔ハ大ニシテ今ハ小キナルヘシ之ヲ本艸家ニ尋スレトモ。虫ノ名。未分明追テ考
フヘシ因ニ梅雨ノコトヲ論ス。本草綱目曰梅雨或ハ作微雨言其沾衣及物。
皆生黑黴也云々芒種ノ節霪雨多シテ黴ヲ生スル故ニ微雨ト記シ。梅実
黄ム時ニハ梅雨ト記シ。栗花ヲル時ニハニ墜栗花ト記スルナリ。今ノ假名曆
及俱注曆ニ五月節ニ入テ初ノ壬ノ日入梅雨ト記ス然レトモ司曆博士賀
茂在方ノ編ル曆林問答ニ入梅ノ説ナシ。又西土ノ曆ニ不載。入梅ハ推
歩測算ニモ関ラス。又五行家ノ相生相尅ニモ拘ハラス。故ニ入梅中ノ日
数諸説紛々々矣。タニ四五月ノ此霪雨多キ時ヲ云フナルヘシ。如何トナ
レハ五雜俎卷之一天ノ部曰江南毎歳三四月苦霪雨不止百物黴
腐ス俗謂之梅雨蓋當ル梅子青黄時也自徐淮而北則春夏常ニ
旱ス至テ六七之交秋霖不止物始黴烏。俗亦謂之梅雨。蓋黴與梅

同音也云々貝原先生ノ説ニ每五月ノ此梅子黄ハミ落ントスル時
霪雨數日ノ後雷鳴アツテ晴ルヲ出梅ト云々分明ナラヌ説ナレトモ
能ク入梅ノ理ヲ考ヘ得タリ李時珍ガ説ニ芒種ノ後壬日ヲ入梅ト
シ。ハ暑ノ後壬日ヲ出梅トスト説クハ明白ニ似テ實事ニ合ヒガ
タカラシカ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

森村

公封内

村高四百六十四石零六升

不動寺領

同 二十石七斗六升九合

諏訪神社

相殿也

八幡社

御領主

御寄附高

二石二斗五升 田壹段五畝步也

神夏

山神

二箇所

地藏堂 石像也

栗嶺寺末
善照寺

永正十年酉五月三日 開基善正

古城趾

此村山中ニ在リ地名ヲ城ノ腰ト云

羽栗村
公封内
村高七十五石二斗二升
土方候封内
同 三百三十六石三斗一升九合
共四百一十一石五斗三升九合

林宮牛頭天王社

吾友中村橘齋曰林宮蓋栗栗宮誤ナラニ姓氏録ニ栗栗
和安部朝臣同祖彦姥津命三世孫建安命之後也疑祀彦姥津命乎

十禪師祠

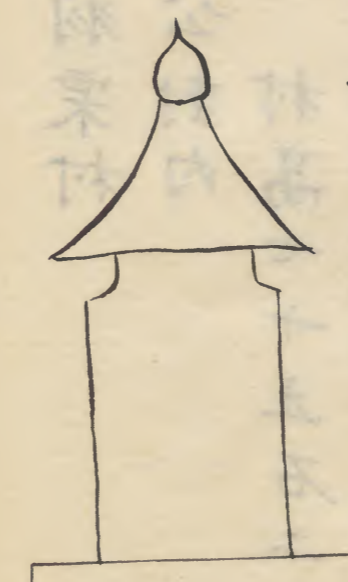
八王子祠

住吉祠
春日祠

五社共ニ同山ニ座ス撰社トモ見ヘス別ノ勧請ナルヘシ
羽栗村 森村 堂村 新免村 立合地也

古城趾
佐久間久右衛門居城ノ舊跡ナリト或ハ中野久右衛門ナリト云

石塔二基
林ノ宮西南隣也一ハ高サ七尺許一ハ高サ六尺許



土俗云殿ト御方トノ塚ト云
又ハ猿丸太夫ノ塚ト云又ハ
源俊頼卿同俊重卿ノ
塚ト云

記曰傳ヘ云フ丹後ノ局ノ墓ナリト。東鑑十五卷ニ宣陽門院ノ母
堂丹後二位ノ尼ノコトアリ。同十九卷ニ實朝御臺所ノ女房丹
後ノ局ト云人アリ。此二人ノ内此地ニ墓アルヘキ子細モナリ同名異
人ナルヘシト云フ貞昭 按ニ猿丸太夫ノ塚ハ曾東ナリ俊頼親子ノ
僑居シ玉フ地ハ黒津也。而シテ田上ニテ物故ノコトヲ聞カズ。而シテ此
石塔往々見ル所ノ經塔ノ形象ニシテ墓碑ノ形象ニ本ノミ、

淨土宗阿闍梨寺末
法林寺
碓磧山
蓄峯

村老口實一話

去寛政三年當村久兵衛丸者ノ居宅裏ニ井戸ヲ堀ント欲シ地ヲ堀

ルイ七八尺ニシテ伏石アリ其四方ノ土砂ヲ取去テ能クミレハ人作ノ石ノ箱ナリ長七尺幅五尺蓋ヲ発キ見レハ半分許リ朱存スル外一物ヲ不存其朱ノ中ヲ探リ求ムレハ金環一ツヲ得タリ則チ領主土方河内候侯江訴ヘケレハ有司曰是石棺ナリ如是厚キ葬リハ貴人ノ墓所ニシヘシ元ノ如ク埋ムヘシト下知セラル依テ金環共ニ元ノ如ク納テ埋ムト云々按ルニ骸骨且内ノ木棺皆消滅セシト見ヘタリ真ニ千歳以上ナルヘシ而ルニ金環ノ現然タルヲ見レハ金ノ堅剛素ヨリ然リト虫トモ窮理ノ為ニ斯ニ嘯々ス

外... 堂... 時...

堂村

土俗曰往昔大堂アリニ地ナリ故ニ其名アリト云然レトモ寺号且年代モ詳ラカナラス今田ノ字ニ堂ノ奥ト云所アリ是古ノ堂趾ナルヘシ公封内

村高二百七十石零五斗九升五合

鎮座年代不知若宮八幡社

御領主御寄附 田壹段五畝步

神事三月二ノ午日

大將軍森

東本願寺末教誓寺

貞享元甲子年 開基淨了

享和二年壬戌六月廿九日田上川洪水。村屋悉ク
流失ス。因テ民家ヲ今ノ地ニ移ス。于時流失セザ
ル所ノ兩三戸仍舊地ニ在リ

堂林
天部曰昔大嘗...

今村新田

公封内

村高九十七石六斗二升四合

慶安三年寅二月天津圖滿院宮ヨリ勸請

白山権現社

神事三月二ノ午日

山神森

高岸寺

開基不詳

但心寺

年代不知 先祖了圓

高野山
山科

神皇正統記

白山歌歌珠

...

休園山十六...

公姓内

今休藤田

栗太郡志卷之十九

中津田中貞昭編

田上郷

黒津庄

黒津村

稻津村

大友村

穢多也

古間 = 黒津村 稻津村
在リ今廃ス

太支村
關津村

栗本縣志卷之十

柳野田中頁部職

柳野田

大支林

黒津村

田土

黒津村

公封内

村高二百五十一石七斗八升四合

大日山

山上ニ大日堂アリ水尾山大日寺ト号ス

續古今集ニ

衣手ノ谷上川ヤ。沐ルラン。水尾ノ嵐ハ。サハマサルナリ

當寺ハ行基菩薩ノ開基也。荒神祠。三十番神祠。堂ノ東側ニ在リ。此山。勢多橋ヨリ一里許リ下ナリ。黒津村ヨリ五六町上ニ在リ。勢多川ニ突出テ獨立ス。故ニ川流。山足ニ濶キラレテ曲リ流ル。又其曲流ノ所水中大石布置シテ恰イセキ堰ノ如シ。故ニ水速ニ流ル。一ヲ

得ス。常ニ深^{マクリル}回ス此山。下ニテ自然ニ水ヲ堰^{ヒキト}留溢ル、水。下流
ル故此下^{二可許下}供御瀬ノ所ハ如何程大水ノ年ニテモ淺瀬ナリ
記曰土俗云上古竹生島ニツノ島アリ其一島流レ来テ爰ニ止ル。大日
山是ナリト云然ノ後ニ竹生島ニ嶋繫キノコアリト云。妄説ナレトモ
茲ニ記ス。又貝原篤信。荒神山ニ登テ螢火ヲ見ルト。書レモハ此山ニ
荒神ノ祠在ルヲ以テナリト云々
縁起曰杳如來者行基大士之所造而天真ノ雲母也。唯御頸圓
備而其餘尊形髣髴也。古往今來。秘佛而雖村民無拝瞻者。
依于堂宇頽敗村之信人等再鼎新之。其次暫時開扉令結縁
依之皆始得拝謁作難遇之想也。山後湖岸向原本ノマ、孤起處曰蛇
溪又去堂十餘仞許有小池号乳池也云々

乳池

大日堂ノ傍ヲ十間許ニ在リ。至テ小池ナリ其水深カラズ。然レトモ。
早魃ト虽モ。水涸渴セズ。婦人乳ノ乏キ者。大日尊ヲ拝シ。此水ヲ以テ
吾乳ヲヒタセハ。忽チ涌出ト故ニ乳池ト云
貞昭按。行基大士。此山上ニ。大日尊ノ御首ハカリヲ彫刻シテ置レシ
ハ。山ヲ以テ大日尊ノ胴體トセラレシト見ヘタリ。其音深哉。遠哉。行
基姓ハ高志氏。和泉國大鳥郡人也。以天地天皇七年生レ即武
天皇二十一年二月寂ス。聖武ノ朝ニ在テ任大僧正時ノ人号曰行
基菩薩。

本朝通紀曰基所過。遇嶮難架橋。修路築阪。穿渠池。百
姓至今蒙其利焉。云々由是大日山ヲ考ルニ後世湖水ヲ減セント

テ此山ヲ墮キ開カバ。湖水半ヲ減スヘシ。然ルトキハ開田置地置村落
トキハ湖ノ狭小ナルト今ノ半ナルヘシ。如シ大雨頻リニシテ。八百八川洪
水ナルトキハ。受ル所ノ湖ノ量。狭小ニシテ。國中ニ溢溢シテ火害
並ラビ至ラン。又山城河内ノ處々川流急ニ降ル故又災害多ナル
ヘシ。行基大士山ヲ大日如來ノ尊體トセシハ後世漫リニ此山ヲ墮キ
穿タルノ計籌ナルヘシ。大士當時ノ兆民濟度ノ為心ヲ用ル所
ノ如シ。嗚呼真ノ佛者哉今ノ無實空論ヲ以テ稱濟度者トハ實
壞ノ差ヒナル哉

因ニ云余一日好古社中ニ從テ登ニ此山石塔ヲ攀キ盡テ門ニ入リ謁
大日堂拜兩祠而堂ノ後ニ行ント將スルニ樹抄森然タリ。分ケ入ル
ト半町許リニシテ。小高キ所ニ至レリ。斯ニ里保ノ如キモノ。三基並ヒ

築キタリ。社中云フ。古塚ナラン余退テ而後愚考スルニ。行基大士。大
日尊ヲ造リ。加ルニ三基ノ冢ヲ築テ此山後代ニ至ルマテ全カラシメテ
祈ルノ法方ナランカ。譬ハ伊字ノ三點ニ象リ具足圓滿ニシテ万代
不易。不虧不崩ヲ呪スルカ然トモ余佛道ヲ不識故ニ如斯法方有
ヤ否ヤ不知。目而設ニ一話茲ニ録ス伏願ハ知識ノ人勘考シテ愚蒙
ヲ照サシテ是祈ル

御領主

御寄附高一石九斗六升九合
新田三段五畝步
度石

大日山ノ麓水涯ニ在リ形ク亀甲ノ如シ

記曰此岩根水中ニ入リ幾尺ト云フヲ不知水ヨリ出タル処三尺奇

許相傳、湖水増シテ此岩ノ上ニノホル時ハ近江一國ノ洪水ナリ故ニ土民此岩ヲ規矩トシテ淺深ヲハカルト云

鯨岩

度石ノ傍ニアリ形千鯨ノ如シ故ニ号リ

三ツ石

大日山ノ向ノ水中ニアリ旱魃ノ時ハ見エル石ノ数三ツアルニ名アリ。一ツハ方二間許。一ツハ方九尺許。一ツハ方一間許。皆高五尺許。

龍王岩

水上ニ出ル所一尺余。水底何丈トモハカリ難シ此岩龍神来リ遊フ岩ナリトテ旱魃ノ歳ハ必此岩ニ雨ヲ禱ルニ驗シ有ト云
右四件石ト岩ノ意味ナシ土俗ノ唱ヘノマ、ニ記スルノミ

大日崎

大日山ノ水涯ヲ云

供御瀨

黒津村ト大日崎トノ間夕ニテ。南郷村向川ノ滋賀郡越ノ瀨ナリ。此瀨ノ上下十四五間ノ中ノ如何程洪水ノ時ニテモ淺瀨ニテ至テ深キ所ト虫モ人ノ肩ニ及カ不及カノ間夕ナリ其地理ヲ考ル川上大日崎ノ大岩ニテ水ヲ堰留ルニハ溢レ流ル、夕ケノ水ナリ又此瀨ヨリ下ハ地勢次第ニ昇ク低ル、故ニ水ノ淀ムヲナシ且川幅モ廣シ故ヲ以テ格別ノ淺瀨ナリ

公儀監察官巡見ノ日涉リ歩、黒津村ヨリ一人。南郷村ヨリ

一人馮カキツクリ三川ノ真中ニテ出合。左右ニ分レ返ル是巡見ノ時。涉歩

ノ定格トス

記曰^上川幅百四十一間 公儀古繪図ニハ川ノ廣サ二町トアリ。元祿
年中御改新繪図ニハ二町十二間トアリ。毎歳 公儀ヨリノ御目付
中此瀬改メ玉フト也其初詳ナラス 台徳院殿御時ヨリ始ルト云^中
相傳フ蒲ノ冠者範頼。此処ニ来リ黒津ノ土人早瀬。道方ノ二氏ヲ
瀬踏トシテ此川ヲ渡セリ。或云其瀬踏ノ賞トシテ。一人ヲ早瀬ト名
ツケ。一人ヲ道方ト名ツケ玉フト云リ。此瀬ヲ供御ノ瀬ト云或ハ貢御
瀬トモ云。此瀬ニテ網代ヲ設テ魚ヲ捕テ。朝廷ニ貢ス故ニ貢御瀬
ト名ツクト云^中
盛衰記曰範頼ハ勢多ノ手ニ向ヒタリケレトモ橋ハ引レス。底ハ深シ渡
ルヘキヤウナケレハ稲毛三郎重成榛谷^カ四郎重朝ヲ先トシテ田上貢御

瀬ヲ渡シツ、石山道ニ攻上ルト云

太平記曰承久三年六月後鳥羽帝諸將ヲシテ宇治勢多ニテ北條ノ
兵ト戦ハシム義時ガ将相模守時房ハ勢多武田五郎信元ハ供御瀬ニ
向ヒ柴田橋六此瀬ヲ渡ス云々天正元年足利將軍義昭信長討シ勢
多橋ヲ引石山ヲ誥ノ城ニ構ヘ立籠ル信長柴田勝家ヲシテ搦手トス
勝家田上へ廻リ供御瀬へ渡リ石山へ責近ク山降人ニナツテ城落タリ
^中略又心見瀬トモ云
今昔物語ニ近江國志賀郡古市郷ノ東南ニ心見瀬ト云アリ云々
夫木集ニ

明ケストテ心見マテハキニケレトマダ深キ夜ノワタリナリケリ

貞昭^ニ按建部神社^{勢多郷}神領村社記神事之部云七月七日御涼之神事

神輿若宮関津村新毛知 渡御。御帰座於黑津御供獻上。今之供御

之瀬是也田上杣郷里村の毛知比宮ヲ建部神社ノ別宮トシ。関津村新毛知比宮ヲ建部神社ノ若宮トス。事ハ神領村建部神社ノ條ニ記ス

供御ノ瀬ノ名此故事ニ依ルヲ正トセン歟

或説云天武天皇大友皇子ヲ避テ大津ノ宮ヨリ吉野ニ赴キ玉フ皇子

兵ヲ以テ之ヲ追ントス天武帝早ク之ヲ知テ路ヲ變ヘ伊賀路ヲ經テ大

和ニ入ト欲シ此地ヲ經玉フ南郷村ノ土民此瀬ヲ教ヘ奉リ黒津村土民

アワレニ奉リテ供御ヲ具ヘ奉ル 天皇歡感有テ供御瀬ト呼玉フト云

貞昭 按ニ日本書紀曰天命別天皇即天 智帝卧病以痛之甚矣略天皇勅

東宮即天武帝天 授鴻業乃辞讓之曰臣之不幸元多病何能保社

稷皇ノ太弟也 願陛下奉天下天 陛下仍立大友皇子天皇ノ御子也 宜為儲君臣今出

家為陛下欲修功德天皇聽之即日出家法服略壬午入吉野宮時

左大臣種賀赤兄エフミ 右大臣中臣金連及大納言蘇賀果安臣等送

之自菟道返是夕御島宮癸未至吉野而居之云々由是考之天

皇ノ太弟辞讓天位吉野宮ニ向ヒ玉フ堂カタル啓行且左右大臣及

諸卿菟道マテ御送り玉フニ何ヲ供御瀬ノ危キヲ涉リ玉ハンヤ暴

虎馮河ハ庶人タモセズ然ルヲ況ヤ天武天皇ヲマ。又大勢ノ從者侍

奉リ何ヲ黒津ノ土民ノアワレミヲウケ供御キコシメシ玉ハンヤ信用シ難

キニ似カリ

螢亭舊趾

供御瀬ヨリニ所許川下ニ在リ膳城 君侯四五月ノ比螢ヲ觀シ

玉フ亭ナリ。今ハ無シ土俗曰今世ハ此村ノ片岡某ノ屋鋪ヲ螢亭ノ代

ニ充テ玉フトソ

ナツハイ堂舊趾

村中ニ在リ相傳フ空也ノ流ヲム鉢々、キト云モノ毎年七月此所ニ
来テ瓢ヲタ、キ鉢ヲナラシテ踊リ念佛セシト云リ。件ノ鉢扣ガ子孫
享保年間マテハ相續シテ有トナシ。今石佛二軀在ル処彼堂ノ
舊跡ト云

記曰拾玉集慈鎮ノ歌ニ

田上ヤ細代ハ冬ノ物ナレト来テニヨ夏ノ涼ミ所ヲ

鉢扣ノ七月ニ来リシトハ送ニ後ノトナルヘシト云々

貞昭按ニ師大納言経信卿別業ヲ此地ニ構ヘ玉フト聞ク然ハ
當時ノ御涼所ナルヘシ又慈鎮ノ詠モヨク符合ス。又堂名辭ハ残
リテ文字知レズト虽モ強テ譯セバ、夏^{ナツ}榮^{ハエ}堂。トランカ。マイユエヨ通音ナレ

ハ^{ハエ}榮^{ハエ}ヲ榮^{ハエ}トモ訓スベキカ

一説ニ云夏^{ハエ}校堂ト云フヲ。ナツハイト唱ヘ誤リタルナルヘキカ。名越ノ校トテ
六月晦日ニ河邊ニテ校スルトアリ略此地モ大津ノ都ノ時ノ校所ナルヘキカ
夫木集永範ノ歌ニ

千早振田上河ノ清キ瀬ニ千歳ヲ祈ル夏^{ハエ}校シテ

ト云ヘル歌アレハ夏^{ハエ}校堂ナランカ

貞昭按ニ右ノ歌ハ佐久奈度ヲ讀ミタルナルヘシ。大津ノ朝ノ校所
并ニ大七瀬^{ハエ}校ノイ大石庄中村。佐久奈度神社ノ條下ニ記ス故ニ此^{ハエ}略

庄塚

是黒津庄ノ庄塚ナリ。南北七間東西三間一尺柵一本アリ

八島

黒津村人家在ル所ヨリ。少シ下ニアリテ皆河中ノ島ナリ

記曰 道万島 大島 高島 上島 小島 シメノ原島

彦九郎島 カフトウノ島

是ハ八島ト云此中チ高島 上島 大島 シメノ原島ノ四島ノ川ノ

向ニ南郷村ノ領分ナリ元禄年中 台命アツテ川村平太夫

湖水ヲ減ヒシ為ニ此川筋ヲ穿チ堀カユヘハ八島ノ内六島ハ切崩

セリ今僅ニ黒津ノ道万島 南郷ノ大島ノミハ島ノカタトテ残レリ

其餘牛島アリ名寄俊頼ノ歌ニ

田上ニテ舟ニノリテ。ヤシマト云所ニ霧ノイフセカリケルヲミテヨメル

河霧ノ烟ト見ヘテ立ナヘニ浪カキ帰ル室ノ八島ニ

貞昭因ニ云源俊頼同俊重。治承壽永ノ比田上僑居ノコアリ寒、

川先生曾來村ナリトセリ然レトモ家集ノ詠ニテ勘考スルニ此
村ナルヘシ

俊頼家集曰

ツカナミト云モノ。ウヘニ。ヨコロ子テタビカサナル。マ、ニアヤシケ

ナリケルヲミテ俊重カヨメル

ツカナミノウヘニヨルノ一旅寐シテ黒津ノ里ニ馴ニケル哉

ト。ヨメルヲ聞テ和シ侍リケル

ツカナミノウヘハ黒津ニナカレトモシタノ寐ヨサニシク物ツナキ

同ク家集ニ

田上ニ侍リケル比神ノ里トイヒケル所ニ湯沸シテ人迎ヘケレハ。

マカリケルニ鳥居ノ有ケル前ニ道ニシルヘノモノニヲソロシケレハ。如

何ナル神ノオハシマスツト尋ケレハ。モキヒノ宮ト申ス神ノオハシ
マスト云ヲ聞テ俊重ガタワムレテ申ケル

アレコソハモキヒノ宮ト聞カラニツクノト思フ事ヲコソ祈レ

按ニ神ノ里トハ今ノ里村ナリ黒津ハ其隣リ村ナリ故ニ黒津居

住ナルコヲ知ル。黒津ヨリ曾東マテハ二里餘ナリ如何ニ古ヘナレバ

トテ。二里餘モ浴ニ行玉フコハアルマシキカ又帥大納言経信郷ノ別ノ

地モ此村ナランカ

同家集ニ

田上ニテ月ノアカリケル夜昔帥殿ノオハシマシ。オリノ事ナト

思ヒイテ、ヨメル

古ハオモカケヲサヘサシソヘテ忍ヒカタクモスメル月哉

猶後ノ君子ノ高考ヲ俟ツ

黒津川

源流ニツアリ一ツハ伊賀國於土岐峠ヨリ出西ニ流レ北ニ折レ信樂

黄瀬ノ北ヲ経テ甲賀川ニ合シ大鳥居村ノ北ヲ過キテ大戸ノ滝トナリ

西ノ方ニ流レ田上。牧村。芝原村ノ南ニテ黒川按ニ此里川ト云ハト
不動川ノナレハシト合シ西ニ

流テ勢多川ニ落ツ一ツハ甲賀ノ山間ヨリ出テ黄瀬村ニ至テ西

ニテ一流トナル。一ツハ太神タカミ信樂ノ山間田代村ノ邊ヨリ出西ニ流レ北

ニ轉シ合テ一流トナル。蓋シ此川信樂ノ邊ニ有テハ信樂川ト号

シ牧村ノ傍ニテハ田上川ト云ヒ。家隆ノ渡ト云フ太神山ノ麓ニテ

八里川ト即千里村
川ナリ呼黒津村ノ傍ニテハ則。黒津川ト云ナリ俗ニ普

ク大戸川ト呼フ

記曰古歌ニ詠スル所ノ田上川或ハ谷上川是ナリト

貞昭按ニ古歌或ハ國史ニ載スル所ノ田上川即谷ハ湖水ノ流ニ
テ勢多ヨリ下曾東マテ近江ノ間ハ田上川ト呼ビ其川下山城宇
治ノ間ヲ宇治川ト呼フ武内大臣宿禰忍熊王ヲ追討ス忍熊
王軍敗レテ沈瀨田濟死之。大臣探其屍宇治得タリ
其歌曰

近江ノミ瀨田ノワタリノ潜鳥田上過テ宇治ミトラヘツ

又新葉集衣笠内大臣歌ニ曰

氷魚ノヨル近江海モ風サヘテ谷上川ヤ網代ウツラン

観音堂

本尊聖観音長三尺二寸傳ヘテ聖徳太子ノ作ナリト毎

年七月十日ヨリ同十八日マテ開籠ナリ

佛光寺宗大善院ホ
光明寺

築

供御瀨ノ四五町下ニテ幾瀨モ分リシ所アリセ八月ノ間斯築

ヲカケテ鱧ヲ取ルナリ。古ノ谷上川ノ網代ヲ設ケシモ此地ナラシ

堀川百首國信歌ニ

谷川ノセ、ノ網代ニ日ヲ経ツ、我心サヘヨスルコト哉

新葉集知家歌ニ

セキカクル谷上川ノ登リ築逆卷水ノ落ゾワツラン

稻津村

穢多也

公封内

村高二百三十五石零八升八合

内七十三石四斗四升一合減

百三十石二斗五升九合

寛文六年

里村高ノ内此村江入ル也

東本願寺宗京金福寺末
恩徳寺

天文十一年

住持久説開基

太^カ支^イ村

或云元来太子村ナリ中古太支村ト書ケリト然レトモ不詳ト云フ

公封内

村高三百五十一石四斗五升

牛頭天王社

拜殿 木馬居

相殿

左京極
右地主神

何ノ神ナルヤ不詳

撰社

小祠二座

太支村黒津村同ク祭祀ニ預ル

神事三月二ノ午日

神主高井某

御領主
御寄附高五石

田貳段五畝歩

淨土宗天津華階寺ホ用明山四天王院大通寺

開基不詳至テ小地ナリ按ルニ聖徳太子建立具一ナランカ

太子堂

石像一躰小堂中ニ在リ古物ニシテ何ノ像トモ知レズ土人ハ太子ナリト云ヒ傳フ已前ハ田地中ニ在リ。今ハ大通寺界内ニ在リ

奈良島

河中ニ在リ此村ノ持地ナリ

多師山

記曰此山太師ト書。後太支トモ書。今ノ太支村ハ此山名ヨリ出タ

ルナラント云フ 貞昭 按ニ先生ノ高考信ニ然リ已ニ桐生村如何

ナル故ヲ以テ村名トセシマト疑フ所ニ金勝寺四至疆界ノ古岡ヲ

得テ展覧スルニ桐生嶽アリ。具時桐生村ナシ古岡ノ四方隅

ヲ正シテ之ヲ考フレハ今ノ桐生村ハ桐生嶽ノ麓ニ當レル是レ

山名ヲ以テ村名トセシナリ。太支村モ又此例ナルヘシ

俊頼家集ニ曰

イカハカリ涙ノ時雨イロナレハナゲキオ、シノ山ヲ深ラン

關津村

小名 上関津 下関津

此村ノ河舟湖水ニ通ス此村ヨリ河ノ下ハ峻嶮巖嵯トシテ
流水。碎破スルカ如シ。殊ニ灘所ト称スルモノ。皆此村ノ下モ十
リ。依テ舟絶テ通ヤス故ヲ以テ忌伊勢溪ノ村々。大津ニ出ス柴
薪。此村マテ荷ヒ来リテ是ヨリ舟ニ積ムナリ関津ト云フ名モ宜ニ哉
記曰抑此地ヲ関津ト云フハ古ノ大石ノ関アリシ地ナレハ此ノ如ク名ツ
クル也然レトモ黒津庄ノ中也。古ハ大石庄ノ中ニ有シニヤ但シ大石ト
堺相接スレハ大石ノ関ト呼ヒシニヤト云々

貞昭考ルニ大石ノ関ハ此村ト大石東村ノ界ノ山間ニ在リテ
此ヲ大石ノ関ト云此村ヲ関津ト号クルハ大石ノ関ノ此方ナル

津アルヲ以テ称スル也。関津村ハ黒津庄ナルト勿論也。大石ノ関
ノ名ニ由レトモ地勢大ニ異リ大石ノ庄ト混スヘカラズ

公封内

村高六百三十五石九斗九升六合

新茂智比神社 天平宝字五年三月鎮座也 鳥居。拜殿。本地堂アリ

所齋祀神 稻依別王命 二座也

勢多郷建部神社縁記曰天平寶字五年三月被テ

勅以稻依別王命少彦名命二神併遷座田上五十師嶽

下津般石子号新餅宮以テ為建部之若宮云々

正殿ノ右ニ五輪塔一基。寶塔一基。小塔一基。三基并ニ存ス後

世佛氏ノ徒置シタ。如何ナル故アルヤ。土人ニ尋レトモ知ル人ナシ

神更三月二ノ午日

御領主

御寄附高三石

若宮八幡小祠 鎮座不知 上関津ニアリ

神事三月二ノ午日

御領主

御寄附田貳段五畝步

故信山正覺院稱名寺 浄土宗

開基不知追而可考

五十師嶽

小竹生嶽 五十師嶽ノ中一峯ノ名也 其高直立六十丈許ト云

源俊賴歌ニ曰

白妙ノ花ノ梢ヲメニカケテ五十師ノ峯ヲオリツ煩ワツラフ

又曰

田上ニテ小竹生ノタケニ登リテ遊ヒケルニマユミノ紅葉ヲ見
テ讀ル

モ、ツテノ五十師ノサ、フ時雨シテソツヒニマユミ紅葉シニケリ

白山祠

小竹生嶽ニ在リ

石ノ雨壺

記曰小竹生嶽ノ半腹ニアリ形千圓ニシテ上ノ方真中ニ
凹ナル處アリ。土人歳旱スル時ハ石以テ其石ノ凹ナル處ヲ覆ハ

必ス雨フル故ニ是ヲ石ノ雨壺ト云

先生云一日斯ニ至リテ是ヲ見ルニ雨壺ト云ヘキ物ニ非ス不審ノ

余リ石面ヲ見ルニ文字ノ跡アリ是ヲ水ニヒタシテ熟々見ル

ニ如法ノ字分明ニ見ヘ今一字アレトモ。字痕ナメラカニシテ分

明ナラス是ニ依テ按スルニ疑テクハ古ノ如法経ヲ納シ塔石ノ

残レルナルヘシ此邊往古ハ寺院多ク有シト見ヘテ。天生寺。

福王寺。念佛寺。西福寺。ナト云田畑ノ字多ク。古ハ寺院存

半山

俊賴家集ニ

田上ニテ。ハミ夕山ヲ見テヨメル

置霜ヤ深ハテツランモミジ葉ノムラコニ見ユルハミタ山哉
時雨スルハミタノ山ハ紅葉バノ色ツク程ノ名ニヨツ有ケレ
矢筈嶽 ハツガ 今八里村ニ隸ス

鎮座年代不知 山ノ形チ矢筈ノ弦ヲ受ル處ニ似タリ故ニ山ノ名ニ呼フナリ
諏訪神社 下関津ニ在リ

堂谷

是往古如何ナル堂アリシマ礎石存ス

古城趾 是ヲ源太郎山ト云

人々関津城ト云ハ此山ノナリ相傳フ宇野美濃守
斯ニ住居スト

記曰按ニ六角家ニ山崎源太郎ト云キアリ此人ノ居城ナランカ

板目山

俊頼家集ニ曰

板目山イタシヤハシモ時雨ルレハキクノマ
子シテ色カハリユク

栗太郡志卷之二十

中津田中貞昭編

田上郷
大石庄

大石往古ハ忘伊勢ナリ。其故ハ佐久奈度神社ハ伊勢皇太神宮ノ荒魂ナリ此社ニ於テ水被アリ則大七瀬板ノ其一也因テ忘伊勢ト云ナリ今ニ左ノ村々ノ人。他郷ノ人ニ對シテ忘伊勢溪ノ者ナリト云フ。忘伊勢ヨリ轉訛シテ大石ト称スル也

東村
中村

龍門村

小田原村

此村龍門村ヨリ凡一里許リ

右四ヶ村山城ヲ經テ奈良へ行ノ一道ニカ、ル故ニ並ヘ記ス

淀村

曾東村

此村淀村ヨリ一里許西ニ在リ

右ニヶ村関津ヨリ西南ノ一道ニカ、ル故ニ並ヘ記ス

富川村

此村東村ヨリ一里餘東ニ在リ

此村至テ邊僻ノ孤村ナレハ何ノ庄ナルヤ知リ難シ然レトモ

今土俗大石郷ト呼ブ故ニ大石郷ニ入ルノミ奥山田ノ庄ニ非ス

氷魚

往古田上川勢多川ノ下流ヲ云ニテ漁獵ス今ハ西江州比良小松邊ニテ多ク漁ス

延喜式内膳曰山城國近江國氷魚網代各一處其氷魚始

九月迄十二月三十日貢之按田上川近江山城兩界之間ヲ流ル

故ニ兩國ヨリ網代ヲ掛シト見ヘタリ

大石關舊趾

黒津庄関津村ノ南。大石庄東村ノ北。西村ノ間ノ山路ニ在リ道ノ

左右山巒聳ヘタル坂ノ峠ナル處。関ノ舊趾ナリト云此道東村邊

ニテ南へ行ハ小田原村ヲ經テ山城國郷ノ口或ハ玉水駅ニ出ヅ。東へ

行ハ富川ヨリ甲賀郡信樂ヲ經テ伊賀國ニ出ヅ。西へ行ハ曾東

村ヲ經テ山城國ニ出スルナリ。

三代實錄第四十九曰 光孝天皇仁壽二年六月廿日己巳伊勢齋

宮親王應取近江國新道入於太神宮。仍下知伊勢國。又停伊賀

國。舊路頓宮。下知伊賀國。

實ニ實ニ
本ノマ、

貞昭按ニ舊路トハ此閑路ヨリ信樂ヲ経テ即深鹿伊賀ニ入リ伊
勢鈴鹿郡ニ出スルヲラン。又所謂新道トハ勢多ヨリ野路青
地ヲ経テ川邊村ニ出テ伊勢大路村ヨリ野洲河ヲ涉リ。櫻村ヨリ
水口ニ出テ鈴鹿ヲラン余一日大石庄ノ舊址ヲ探ル。此處閑ノ前後ノ
道路ヲ徘徊スルニ實ニ實ニ官道ノ形象存セリ。嗚呼頭ヲ古ヘニ
回ラセハ車轂擊乎。人肩ヲ摩ルノ地ナルヘシ。因ニ近江國三閑之
始ヲ摘出シテ左ニ贅ス

文德紀曰天安元年四月庚寅始置近江國相坂。大石。龍華。
等三處之閑刻ヲ分配國司健兒等鎮守之。唯相坂。是古昔之閑也。時屬聖
運不閑。鍵出入無禁年代久矣。而今國守正五位下紀朝臣今守モリ上請
加ニ處閑而更ニ始置之也云々

東村

小名 鞍骨 左場野 往古曠野ナリシヲ寛永年
間ヨリ新田ト成ル

公封内

村高六百零五石

鎮座年代不知天智天皇大津宮御宇八年創テ成ル

佐久奈度神社 拜殿 木ノ鳥居
社地中村立會

式内郡中八座之其一也所齋祀神ハ

天瀨織津比咩尊 天速秋津比咩尊

天伊吹戸主尊

正殿一字ニ三戸アツテ右ノ三座ヲ祀ルナリ

別宮一座

所_ニ齋祀神ハ 天速佐須良比咩尊

此祠河ノ向_ニ岸_ニ在リ。石燈臺河ノ此方正殿ノ背後_ニ在リ銘曰辨財天女ト近世神名ヲ誤_ルト如斯。竹生島式内ノ神。都久夫須麻神社_ニ所祀ノ市杵島比咩ノ命ヲ辨財天ト云ノ類也

御領主御寄附 高五石
社領高 田二段五畝
三石三斗九升

撰社

所祀燒鎌神 敏鎌神則級長津彦。級長津比咩ノ二神

ナリト 佐久奈度トハ此神社ノ在ル所ノ地名也。サクナダリ。或ハサクダニトモ

云ハ後世サクナダニヲ轉訛セルナルベシ。ガリモ。ガニモ。本一語ノ轉ニテ相通スルナリ

高山ハ此神社西河ノ向_ニ岸_ニナリ

短山ハ此神社北_ニニテ河ノ東岸_ニナリ

凡中臣大板ノ詞ハ此地ノ様ヲ以テ書ケルト見ヘタリ

大七瀬板所ノ其一也正殿ノ後河岸則板所ノ處ナリ

公事根源頭書曰大七瀬ト云ハ 難波 田蓑島 河後_{以上}

大島 橘小島_{以上} 佐久那谷_{即櫻谷也} 辛崎_{以上}

又忌伊勢ト云ハ伊勢皇太神宮ノ荒魂ヲ斯ニ勸請シテ御

板ヲナスニ依テ名ツクルナリ。委シクハ社記ヲ左ニ録ス

文德實錄曰仁壽元年六月寅朔甲寅詔ス以テ近江國散久難度

神列於明神

三代實錄曰貞觀元年正月廿七日奉授近江國佐久奈度神後五位上

神名帳考證曰佐久那谷。今日櫻谷社在勢多南二里。又曰按木花佐久夜毘賣命ト大ニ誤也後世考證ヲ讀者惑フ勿レ

余一日大石庄ノ幽ヲ探ル依テ奉謁此祠神主某ニ乞テ左ノ神宝ヲ拜見ス

藤田彦面一口 長七寸一分横五寸二分

鼻ノ高サ三寸五分則天曆年間度會ノ神宮ヨリ奉ニ神

勅贈リ来ルノ面ナリト云フ

大般若經數百卷之内其一ニヲ拜見ス奥書曰願主正六位上

右衛門少尉藤原朝臣善隆。筆者僧長俊以此結縁開發

智惠云々寛元五年未二月二十八日或ハ又宝治二年戊申十月十九

日ト按ルニ五百有餘年不蝕ハ奇哉

因ニ云淡野侯家臣大石内藏介良雄カ祖先ハ此神社ノ氏子

ナリ其故ニヤ大石氏ヨリ奉納セシ繪ノ額アリ次ニ乞テ見ルニ

其圖風折烏帽子直垂ヲ着シタル人ノ裸馬ニ乘リタルヲ画

カケリ其上ニ書シテ曰奉掛善神御宝前武運長久息災延

命所寛永六己巳曆三月廿三日施主大石内藏介敬白

貞昭 按良雄仇ヲ討ノ歳ハ元禄十五年壬午十二月十五日也寛

永六年ニ後ルニ九十年然レ右ノ内藏介ハ良雄カ曾祖父也

佐久奈太利神社之紀

抑此大石莊鎮座八張口神社志伊勢座佐久那太利皇太神諸
水之會土風絕塵誠掛毛畏滋賀都 天智天皇大津宮御宇
八年龍次己巳右大臣正位中臣金連奉詔於八張口創被群塵
之地也依創神殿鎮祭三神則

天瀨織津比咩尊

天速秋津比咩尊

天伊吹

戶主命別宮一座

天速佐須良比咩尊

撰宮燒鎌神

海敏鎌神則級長津彦

級長津比咩

之二神等也就中

天瀨織津比咩尊八天照太神荒魂

內宮第一之神也二所皇太神鎮座傳記日向小戶橘檉原被除

之時洗左眼因以生日天子大日靈貴也天下化生名曰天照太

神荒魂荒祭神也謂被戶神 瀨織津比咩是也中臣被解三曰

佐久那太利裂低也俗語指山岳裂開低下之所謂那太李神

祇本源曰那字助語蓋谿谷山岳裂開者也故謂佐久那太李神

中臣太後曰高山末短山末即櫻谷北側鹿飛所東峰号短山

西峯謂高山其麓鎮座佐久奈太李神社也誠哉近江湖水落

出故号八張口可思合也創禊辨曰獅子飛之上峯号高山短山

其兩峯之曰櫻谿爰有被戶神社号佐久奈太利神社大石邑連其社往

昔号忘伊勢至中古謂男石今呼大石此地則宇治殿關白領

地也其後自殿下被進南都興福寺仍自興福寺於大石庄為地

頭代置探題一人下司一人公文力稱一人之由載興福寺官務帳云

宇治殿台記曰江州佐久奈度誠天智朝始被之地余暫領之依

赴彼境遂古風令水禊畢次詣辛崎被尸社云々

本朝世紀曰於佐久奈度所撰之秋詞且簡古文議難通故

文武天皇御宇勅使下向此地增補之是今中臣被也即撰者柿本

朝臣人麻呂也云々

撰津職古文書曰左久奈度之自御禊至今撰津崎漂湯贖

物故名形島亦謂阿我崎後世謂阿間崎今作尼崎少納言入道信西

日向守藤原通憲之國分記曰自近江櫻谷御禊贖物形代漂寄此所略号

代物後世謂大物云々則被除不淨之義正心神之則也天神地祇速

來應其坐依是斷盡諸罪咎災殃致清淨譬如疾風拂雲

霧知江月故顯自性精明宝智之義載唯一源元紀往昔承

平之初鎮守府將軍藤原秀卿領此地延長四年丙戌九月

祈此神社得感應再創神殿然後

村上天皇天曆元丁未年奉神勅自伊勢國度會神宮猿田

彦面一口神劔一振傳當社口宣一書後白河天皇被加社領奉行

辨藏人頭某也

四條天皇延應元年十月鎌倉柳宮賴經將軍之治世佐奈

度社供祭料字治川網代之夏北條泰時相模同光時越後西執

權截判沙汰狀有之

後嵯峨天皇建長元己酉年十月正六位上行右衛門少尉藤原

善隆染筆大般若經六百軸奉納當社中貞觀年中被贈五位

神階然後次第昇進增神階賜正位勳二等仍曰正一位勳二等

拙官自弱冠之初志厚宗源之道一俊奈度皇太神未得心意然詣

當社奉拜神境八張口急流高山短山之隈青々朝日光映
玉垣岸水翠掛白糸之絶景絶感歎仍臨水際為板楔得
元元本本乃神理見備混沌乃舍以誌一卷矣

永正十三丙子年三月

從五位下小槻宿禰是則

左久奈度供祭料細代之事禁制之糸被

院宣之處甲乙人且近隣土民等乱入好殺生之事向後被
停止畢依申沙汰執達如件

延應元年十月

越後守在判

相模守在判

佐久奈度社務中

櫻谷社供祭人真木島邑君等申之近江國大石庄住假地頭
代咸以別儀構細代候事折紙制證文如此早可令辨申子細
之状如件

延應元年十月

越後守在判

相模守在判

大石庄地頭代

櫻溪サクラノキニ
サクナダニノ轉語ニシテ今
通シテサクタニト呼フ

鹿飛ノ少之上ニシテ田上川瀨ノ名ナリ

此所川中峴巖巖嵯タリ河水彼岩ニ激シテ流抹櫻花
爛熳タルカ如之俗コレヲ米カシトモ云能ク名ツケ象トレリ

河水涸渴スルトキハ水中ノ岩高クナル故殊更見モノ也。今茲
文政二年己卯初冬。至テ水涸タリ。
或人斯ニ来リテヨメル歌ニ
常トハニ春ヲトムル櫻ガニ波ノ花咲瀧津岩ムラ
此一首ニテ斯地ノ風景ヲ相像スヘシ

俊頼家集曰

田上ニテ八月斗ニツレノノナリケレハ。ナニトナク。アユミイテ、
櫻谷ノカタヘマカリケルニ道ノ遠カリケレハ休ムトテ式部
ノ大夫ノ讀ル

春ナラハ櫻谷ヲハ見ニユカジアキトモアキヌ道ノ遠サニ
ト云テ聞テ和シ侍リケル

俊頼卿

サクラ谷。マコトニ。ニホフ比ナラハ道ヲアキトモ思ハサラマシ
拾玉和歌集慈鎮和尚ノ歌ニ

湖テルマ櫻谷ヨリ落来ル波モ花咲宇治ノ網代木
鹿飛

是田上川ノ瀬ノ名ナリ佐久奈度祠ノ傍ニテサシ川上ノ方
也兩岸大石相連テ河幅至テセマシ

記曰水幅六間四尺アリ。切通シノアイタ七間許。兩岸ノ山ト山ト
ノ間ノ徑リ二十八間此處至テ川幅狭キユヘ鹿モ飛越エルトテ
其名アルナリ

石良瀬

記曰則鹿飛ノイナリ歌枕ニ

氷魚ヒヲモサヲ住カタシトヤ思フラン石良イシラカ瀬ニ網代打ナリ
是ハ俊頼田上ニテ石良カ瀬ニ網代打ヲ聞テヨメルトアリ

遺愛石

鹿飛ニアリトナン

妙見山

山上ニ妙見ノ祠アリ故ニ号ツク

妙見祠

鎮座年代不知 一ニ銘鈿大明神ト云

妙見山ニ在リ

記曰神咒經曰靈符本尊所祭北斗。祿存星。

稻荷祠

鎮座年代不知

森中ニ影向石アリ故ヲ不知

明見山淨土寺

淨土宗華嚴寺末

本尊阿弥陀如来相傳フ。春日佛師ノ作ナリト大石良雄

先祖ノ菩提所ナリ良雄カ位牌アルノミ

大石山延命院法樂寺

天台宗廬山北谷松持坊末

本尊藥師如来慈覺大師ノ作ナリ花ニ日光月光十二

神将アリ

御寄附田

下田九畝步
下畑五畝步

毘沙門堂舊趾

今ハ森ハカリナリ

大滝 或ハ謂白糸滝

高サニ丈四尺此川源ハ信樂ヨリ出テ、富川村ヲ經テ、山間ノトコロ滝トナリ其下流田上河ニ入ルナリ

地藏堂

地藏尊ノ石像ナリ相傳テ古昔大滝ノ中ヨリ上リテト云。當村淨土寺持ナリ

夫婦石

田上川ノ東西ノ岸ニアリ高サ三間許ノ石。西方ニ向ヒ立テリ故ニ名ツク

長壽寺 禪宗志賀谷村萬松寺末

中村

中村

公封内

村高二百五十五石

佐久奈度祠

東村佐久奈度神幸ノ地ナリ

若王寺 浄土宗幸階寺末

或云古ハ奥ノ堂ノ舊地ナリト云

忌伊勢川

或ハ大石川又ハ中村川トモ云源、横岩山ヨリ出テ北ニ流シ、門村ヲ遠リ西ニ折中村淀村ノ間ヲ經テ北流シテ河埜川ニ入ル川幅三十間許。

小山判官屋鋪舊跡

土俗呼テ小山ト云フ此判官何人ナルヤ不詳

大石氏屋鋪舊跡

兩所アリ一ハ山ニテリ。是ヲ古屋鋪ト云内藏介先祖ノ墓此内ニテリ。今ハ平地ニテリ東西二十間南北三十間許也

記曰大石氏元来江源ノ家臣進藤氏ノ家人也進藤氏今ハ近衛殿ノ家臣ト成。大石内藏介良雄ハ播磨國赤穂前城主淺野内匠頭長矩侯ノ臣。秩千五百石格國老タリ。父ハ権内母ハ池田氏備前國岡山ノ國老池田出羽ガ女也。良雄曾祖父皆内藏介ト号ス世々赤穂ノ國老タリ祖父内藏介。権内ヲ生ム権内良雄ヲ生ム権内早ク卒ス良雄嫡孫ヲ以テ祖ノ嗣ヲ承ク。其人ト為リ簡

静ニシテ威望アリ國人ノ為ニ重ニセラル。元禄十四辛巳年勅使江戸ニ来リ玉ヲ淺野長矩館侍ノコトヲ領ス吉良上野介良英侯事ヲ驕リ。無禮ナリ。長矩ト隙アリ。長矩侯怒リニ堪ヘズ劔ヲ拔テ良英侯ヲ撃ツ僅ニ其頭ヲ疵ツ。私ノ怒ヲ以テ公法ヲミタルト云ヲ以テ罪ニテ死ス。讐言敵吉良侯自若タリ。是ニ於テ良雄等四十六人ノ義士心ヲ一ニシテ。晝夜肝膽ヲ推キ翌年元禄十五年壬午十二月十五日終ニ讐言敵吉良侯ノ首ヲ獲テ淺野侯泉下ノ耻ヲ雪ク嗚呼忠臣哉義士哉略室鳩巢先生ノ義人録。及片島武矩太平義臣傳ヲ著ス故ニ大略ヲ記スル而已矣

貞昭 按淺野侯ニ初テ仕ルハ良雄ガ曾祖父ノ内藏介ニ

テ寛永六年己後ノ一ナルヘシ如何トナレハ。佐久奈度神
社奉納ノ繪馬ニ大石内藏介ト。ハカリ記シテ。國所ヲ録
セサルハ。他國ヨリ奉納セシモノニ非ズ。此村ヨリ奉納シ其後
浅野家ニ仕ルナルベシ。往々義士仇ヲ討ノ記録ニモ良雄ヨリ
四代ノ祖ハ近江國大石ノ庄ヨリ出タリト。又考ヘ合スベシ

龍門村 村名未考

公封内

村高四百二十六石零七升五合

正八幡神社 鳥居 正殿ハ棟作り

棟銘曰 正平七年壬辰二月廿八日棟上龍門庄松尾安藝

阿闍梨公文僧幸俊 下司大進僧□用

此時 大工奥山田次郎太夫藤原正國
小工奈良西京孫三郎玉手行長

駒井東溪ノ隣村ニ大工某アリ 客歳此祠造嘗ニ依テ

彼ノ大工某預ル。右ノ文書棟梁ニ彫刻シタルヲ以テ寫シテ

東溪ニ贈ル東溪余ニ示サル故ヲ以テ右ニ録スト云フ

因ニ云奥山田ト云地名ハ曾東邊ノ郷名ナルヘシ未タクハ曾東ノ

條下ニ記ス

因ニ云正平ハ南朝ノ年号ニシテ正平七年ハ北朝ノ文和元年也。龍門村平安城ヲ去ル_レ僅ニ十里ニシテ如斯南朝ノ年号モナクユレハ其初メ天下ニ統一統ナラサレ_レ知ルヘキナリ

御寄附

社領高田ニ段五畝歩

撰社三座

何ノ神ナルヤ不知

龍音寺淨土宗天津華階寺末

正願寺同上

慶善福寺

往古ハ大地ノ由今ハ舊趾ノミナリ

小田原村

小名

上村

下村

民家在ル所ヨリ小田原村峠マテ凡十五町許此峠則近
江。山城ノ國界ナリ。峠ノ頂キ凡方三十間ノ平地ナリ

因ニ云此峠道西東ナリ。西ハ禪定寺也東ハ小田原村ナリ
峠ノ西ノ端ニ石塔一基アリ。銘曰先祖代々精靈。其背面
曰明和ニ乙酉年三月五日禪定寺上村施主大工藤原藤
四郎廣友ト録セリ

公封内

村高二百二十二石六斗七升

鎮座年代不知
正王神社

鳥居

何ノ神ナルヤ土人ニ尋ヌレトモ知レズ神前ノ金口ノ銘ヲ

見ルニ山王十禪師ト記シタリ十禪師ノ一前ニ辨ス

小堂

正殿ノ左ニ在リ金口ノ銘ヲ見ルニ八幡宮ト記ス堂中ヲ
窺ヒ見ルニ一龕アルノミナリ。記曰龕中木像長三尺一寸弓
箭ヲ帶シ玉ヲトアリ按ルニ此邊藤原秀郷居城ノ地ナ
レ秀郷ノ像ナランカ余此地探幽之日採茶ノ秋ニテ村中
ニ問人ナク誰ヲ頼ミテ拜スルヲ不得遺憾哉々々

二社神祠 下村ノエ神トス

村合東ノ山ノ麓ニ在リエ人ニ尋レハ明神ノ祠ナリト云按
ニ二社ノ名アルハ内外ノ太神ヲ祀ルナルヘシ

榮^{法華宗}泰山本安寺

観音堂

本尊十二面観音也堂ノアル山ヲ観音堂山ト云

三尾寺舊趾 今ハ池ナリ

記曰長十五間廣八間許ノ池ナリコノ池小田原村曾東村。禪
定寺村ノ池ナリ故ニ三ツノ池ト云フナランカ然レトモ此説モ
定カララス

八王子森林

土俗相傳フ古ハ八王子ノ祠アリト傍ニ池アリ又八王子池
ト云

雁^{ツカ、ミナ}鳥^{ミナ}峯

俊頼家集云田上ノ山里ニ雁鳥ノ峯ト云所ニテ雉子ノヤク

ヲ聞テ

今コソハ聞モアハスレ雉子鳴遠ノ高根ハ鷹峯カモ

宇沼田原越

是小田原村ヨリ山城國へ越ノ道路也勢多ヨリ黒津。太
支。関津。東村。中村。龍門。小田原。ヲ經テ峠ノ國界マテ三
半餘。國界ヨリ宇沼へ三里半。又國界ヨリ禪定寺。岩本。
荒木。郷ノ口。ヲ經テ玉水駅。ニ出ツレハ奈良街道ナリ

淀村

記曰定家卿ノ顕注密勅ニ淀ハヨトミナリ。水ノ流モヤラテ。

トゴホリ。又ルク。トマレルナリ。夫ヲハ淀ト云ト此地モ田上川ノヨ
トミナレハ斯ク呼リ

公封内

村高二百七十九石六斗六升八合

頭座年代不知
八幡神社

古城趾

今ハ茶圃トナル字ヲ城山ト呼フ相傳フ山口玄蕃頭カ居城ナ
リト云フ

淀堂舊跡

峯山ト云フ所ノ内茶圃アリ是淀堂ノ舊跡ナリ則チ字ヲ
今ニ淀堂屋敷ト呼リ。古昔ハ淀堂トテ毘沙門ヲ安置セシ
堂アリト云フ

浄土宗華階寺末
專念寺

曾東村 ソツカ

至テ山中ノ孤村ナリ淀村ヨリ一里許リ西南ニ在リ此村人
家在ル処ヨリ三十町許リ猿丸嶺ナリ。其南ハ山城國禪定寺
村ナリ西ハ田上川 勢多川ノホナリ ナリ或曰曾東ハ帥家ナリ帥ノ大納言
経信卿別業ヲ此地ニ構ヘ玉フ故ニ号クト余按ニ不然委クハ
黒津ノ條下ニ記ス

公封内

村高四百二十六石三斗二升四合

鎮座年代不知
御靈神社

拜殿 鳥居

所齋祀神ハ秦川勝ノ男武智麻呂ノ靈也

相殿

貴船神社

御寄附

社領高一石五斗

聖德太子開基
安興寺

本尊不動明王并大日如来地藏菩薩觀音堂本尊ハ

増長ノ作ナリト

弘長二年再建ノ棟札曰聖德太子開基云々

記曰永長元年ノ比觀慶ト云シ僧此寺ニ住職ナリ其僧ノ記録
曰上宮太子守屋連ト戦ヒ暫ク此地ニ蟄居其後守屋ヲ亡シ
此地ニ伽藍ヲ建立シ安興寺ト号スト云々又土俗云往古ハ大伽藍
ニシテ古佛靈寶モ数多アリシニ數度ノ災上ニ恙ク鳥有ト成ト云々

鎮座年代不知
小田八幡祠

此村ヨリ二十町餘南山城級喜郡へ越ルノ路次ノ傍ヲ山
中ニアリ此邊ヲ小田谷ト云此祠ヲ北東へ流ル、溪川ヲ小田川
云至テ舊祠ナリ祠ル神不詳。後人ノ高考ヲ俟ツ

岩尾

此村ヨリ八町許リ南スベテ山逕崎嶇タレトモ此處方五間許ノ
平地アリ今樵牧ノ休息後ハ峯巖參差ナリ前ハ小田川也俗呼テ湯
尾ト云又天狗岩ト云フ是猿丸太夫幽栖ノ地ナリ則此地奥山
田庄或云奥山ノ詠モ此地ニテノナルヘシト

鎮座年代不知
猿丸大夫祠

此村人家在ル所ヨリ三十町餘南猿丸峠ニアリ

記曰近江國山城國。西國ノ堺ニアリ或ハ山城禪定寺村猿丸峠
ト或ハ近江曾束村ノ猿丸峠ナリト然レトモ西國ノ界ナルト分明
ナリ。又猿丸太夫トハ前々大平記ニ弓削道鏡トテ威猛氣高キ
僧ナリシカ。孝謙女帝ニ寵セラレ。帝位ヲ望ミシカバ事アラハレテ下
野國ニ配流セラレヘキヲ。昨日今日マテ御寵愛ヲ蒙リシトハ其
儘配所ヘ遣サンモ流石ナリトテ。近江國田上ノ別業ニ三年留主
ノ表ヲ終ラセ其間髪ヲ生シツ。名ヲ改テ猿丸太夫ト云ト載タリ
甚以テ非ナリ。道鏡ハ下野國ヘ流サレ藥師寺ノ別當トナリシコト明
ラケシ又上宮太子御子ニ弓削王ト号スルアリ。是ヲ猿丸太夫トス
ル者アリ。猿丸ニ三人在リ同名異人ナリ。此猿丸太夫者歌人猿
丸ナリ拾芥抄ニ曰古傳曰猿丸太夫何レノ時ノ人ト云コトヲ不知官

名見ヘスト云々

貞昭曰 寒川先生ノ説ノ如ク曾束ノ山棲ニ在シ猿丸ハ歌人ノ猿
丸ニテ道鏡トハ別人ナリ。加茂真淵ノ初学ニ曰猿丸ハ弓削道
鏡ナリトイフカ。道鏡ハ續日本紀光仁天皇
ノ條下ニ寶龜三年ニ配所下
野國藥師寺ニテ死セシト見ヘタリ。其後九コノツキ繼ノ御代ナル

仁和天皇即光孝ノ皇子
天皇是貞親王ノ歌合ニ出シトハ何コト也是
歌

人ノ猿丸ハ仁和中ノ人也光仁帝寶龜三年ヨリ光孝帝信
元年マテ百十餘年相距レハ同人ニ非サルト知ルヘシ同書云猿丸ノ

家集トテ有ヲ見ルニ今ノ京コノカタノサマニテ必奈良ノ歌ニ
アラス又古今集ノ真名序ニ小町ヲ衣通姫ノ流。黒主ヲ猿
丸太夫ノ流ナリト有ハ。共ニ由シモナキトナリ云々

扶桑隱逸傳曰猿丸太夫者深州郷人也至今土人名深州曰猿丸

郷中于後隱乎江州曾東山中。鴨長明方丈記云涉田上川尋猿
丸大夫之墓是也。猿丸善和歌。古人云其奧山紅葉之歌與在羽林
西對春夜之詠相抗衡云。

又云余故尋曾東山中過田上川行一二里餘。臨于溪上有巖
居之跡幽趣可悅。却入山中一里許。有猿丸祠。此亦大夫遊處之
地。而村民奉祀也。

鴨長明無名抄曰。或人云田上下曾東ト云所アリソコニ猿丸大夫
カ墓アリ庄ノ堺ニテ。ソコノ券ニ書ノセタレハ皆人知レリ云々。

貞昭 今茲曾東ノ幽ヲ探ル彼ノ元政上人草山集ノ文ニ曾東
ニ至ラハ必ス石山ヨリ入ヘシト云指南ニ依テ河ノ西ヲ下リヌ。又今
ヨリ後ノ人ノ道知ルヘノ為ニ文ノ拙キヲ愧ジ左ニ記ス。

曾東紀行

欲探曾東之幽久矣。今茲文化丁丑二月十日使僮負行厨朝發
南行過卧龍橋寺邊村山即石柳陰亭而憩。經平津村駐杖於
江上哦云。

藜杖草鞋行探春野梅臨水更精神
烟霞痼疾醫無術 慚愧路傍耕耨人

距平津村二里許以六町為一里下皆同曰八萬野近年大津富商某墾中莽
開阡陌幾盡地力。余之嬾惰過之有感賦云。

耒耜墾田得 力耕忘冷炎
間人甘棄物 黃鳥不針砭

經南鄉村西邊坂道三里至櫻嶺サクラトウケ踞樹根以憩春寒料峭櫻

樹未着花乃戲吐一句所謂俳諧者

ウツカリト楊枝ニ折ハサクラ哉

奚僮促行進杖下山路至外畑村河上搭舟而渡舟中危難有詩紀焉

絕壁挾流管兩涯 迅湍激石碎溜瑤

飄搖小艇如風葉 飛沫溼衣身戰危

上岸則曾東村地也嶙峋數程會見野翁揮斧村女戴薪因知村落之近賦曰

沿水入山途幾程 深林認邑犬鷄聲

褐衣皮袴異常俗 誤憶秦民斯耨耕

訪村長某家撰待如親戚然既而使老丁導余尋猿丸矣

古蹟。徑村南路而行一里餘右者溪水潺湲謂之小田川左者嶮巖突兀。俗謂之天狗岩。按山獨管之謂乎。此地即所謂岩尾也。俗呼湯尾猿丸大夫幽棲處也。余與道者登可百步而坐石頭云

曾東村南溪水上 懸崖卓立恰如屏

躋攀坐憶入仙境 千載風流繼結亭

下而逐山逕行二里許到小田谷遙拜於小田八幡祠又行二里經野田山而到猿丸嶺謁猿丸祠從是以南隸山城國云四顧寂莫人跡絕矣此地則奧山田庄目憶奧山詠復戲云

秋ハサソ春サハスゴシオク山田

祠前石燈墨銘曰

松膏日滴

夜月燃燈

千載無滅

神功大興

導者曰曾東東口町許行淀村道傍有方二尺許石謂之猿丸
岩居也。時回首斜日落西以故不果行而歸。

岩窟 俗コレヲウツ穴ト云

此村ノ山中ノ河岸ナリ河トハ田上河。下テ宇治河ナリ余幽ヲ探ルノ日。河水滿テ
岩窟ヲ見ルヲ得ズ。今茲文政ニ己卯年初冬ノ頃河水
大ニ涸渴ス此地一見ノ人ノ曰所謂ウツ穴ト云モノ親シク見タ
リト按ルニ元政法師草山集ニ載スル所ノ記ノ語曰遂ニ見
岩居其岩圍青山臨碧水其下百武許有鉅岩突兀高
可十丈佳趣甚多空翠之中不可久留嗟乎非有仙風
道骨豈能堪棲遲乎ト記セラレシ此岩窟ノイナルヘシ。引導
者ノ罪不輕。他日彼ノ大夫ノ幽棲ノ地ヲ探ル人。草山集ヲ以テ

標準トスルコト勿レ

贅話

余彼ノ祠ニ謁スルノ日石燈籠ノ銘ヲ讀ント欲シテ熟之ヲ觀
ルニ銘ノ前後ニ書シテ曰禪定寺猿丸社乙亥之妹重テ建ツト
按ニ禪定寺村事ヲ企テ謀ル者ノ所為ナル哉。如何トナレハ年
号ヲ記セス又新タニ建ル燈籠ヲ重テ建ツト記ス年号ヲ記スル
トキハ時代ノ新シキヲ忘ム故ニカクノ如シ古人曰神明ハ正直
ヲ守ルト。邪意ヲ懷テ燈ヲ獻ス。神明何ゾ之ヲ饗食ニヤ

淨土宗遠源寺末
福壽院飯命寺

縹船

記曰此村ノ人家ヨリ十一町半南ニアリ即河下ナリ川ノ西ハ則山城國

ナリ。此村ヨリ山城三尾村へ出ルノ路ナリ。川幅二十四間。窄セマキ所
ニテ二十三間深サ三間或ハ五間水最モ急ナリ。岸ヨリ岸マテ
大繩ヲ引ワタシ舟子此繩ヲ手クリニシテ渡ル故ニ繰船ト云
ス。此水急流ニシテ艣榜モツカフアタハサル故ナリ

貞昭一日此村ヲ訪フ村老ノ口實一話

此繰舟ハ上古ヨリコレ有リ。南山城ヨリ東海東山両道ニ出ル
ノ捷徑ナリ故ヲ以テ聖徳太子モ此村へ落来リ玉フアリ。又和
泉式部。猿丸大夫。ノ幽栖ノ舊跡ヲ訪フトテ此繰船ニメサ
レシガ折節寒キ比テ彼歩障綿ヲカツキ給フニ。舟子等珍
シク思ヒ。其帽カモノ賣タマワスマト尋子ケレバ。式部歌ヲ以テ答
テ曰

ソツ河ノ。船ノワタコソ。ウルカナレ。我キセ綿ハ。ウルカテハ

ナシ

此話ヲ聞テ後村名ヲ按スルニ此村々ニ沿フ間タハ田上川至テ
急流ナレハ卒然ノ意ニテ。ソツ河ト呼ヒタルナラン。カハノ。ハヲ略シ
テ。ソツカト云フカ。後ノ識者ノ考ヲ俟ツ。上古東海東山両道ニ
出ル近ミナリトハ大ニ理アルトナリ山城ノ舊都綴喜。乙訓。
恭仁ナト皆今ノ平安城トハ南ナレハ信アル口實ナリ

因ニ云フ和泉式部者父ハ大江雅致母ハ越前守保衛女也上
東門院一条院ノ后彰子女房ニテ和泉守橘道貞妻也。仁和年
中ノ猿丸ヲ距ルト八十年餘ナレハ和泉式部ニテハ非サルヘキカ。
又ハ猿丸長壽ノ人カ。土人ノ口碑ナレハ疑ヲ闕テユハニ記ス

曾東越

山城二尾谷へ出ル路ナリ

横岩山

小田原村ノ以南ニ在リ此山近江山城ノ國堺ナリ

白雲山

横岩山ノ東富川村ノ南ニアタル也

永泉茶

此村名品ナリ其茶圃ノ字ヲナガイツシト云フ因テ茶ノ名トナレリ。類聚國史曰弘仁六年夏六月。令畿内並近江丹波播磨等國植茶云々

富川村

大石莊ノ東ニ在リ。路ハ大石東村ヨリ東へ一里許ナリ。又勢多ヨリ。田上郷里村ヲ経テ不動山ヲ越へ。此間九一里。此村ニモ到ル。其レヨリ信樂ヲ経テ伊賀ニ行クノ街道ナリ。至テ孤村ナリ

記曰此村何ノ郷何ノ莊ト云傳フルコナシ。甲賀郡ノ堺ナリ

又山城ノ國堺ヲ黒山ト云也ト

小名 納所 涌出 加河 上手 中上手

中階頭 石倉

公封内

村高三百五十八石九斗七升

仁安二年鎮座
春日神社

拜殿 鳥居

余一日好古社中ニ從テ此村ニ來ル而シテ此祠ニ謁スルニ拜殿ノ傍ニ四間ニ一間半許ノ拜殿ノ如キモノアリ村長ニ尋レ六。答曰是ハ往古例年神前ニ於テ奉納ノ申樂アリ其找敷ナリト其隣リ常信寺ニ詣スレハ長押ニ謡ノ番組大。夫。囉子方。狂言ノ各々ヲ書付タレトモ煤ニクロミテ。シカト讀難シタ。明應六年六月ト顯ハレタリ。其他百ノ大事アレハ皆ハ長押ニ記錄セシト見ヘタリ餘常信寺ノ條下ニ記ス
神事三月三日
御領主
御寄附高一石五斗

幸神祠

赤坂山ニ座ス道祖神ナリト云。按ニ孫田彦命ナルヘシ
山王権現祠 納所ニ在リ
神事三月三日

法音山常信寺

正和二年ノ建立ナリ 本尊釋迦如來
地藏菩薩。春日作 增長天。運慶作
廣目天。湛慶作ナリト
村長云古キ書寫ノ大般若經アリ五六十年前。住寺蝕ミタルヲ歎キ京師ニユキテ書肆ニ談ス書肆云新キ印板ノ般若經ト替ヘ進スヘシト云住寺悦ニテ換ヘラレタリト今元ノ

經匣遺レリ之ヲ觀テ偏ニ遺憾ヲナス而已矣好古社中相共
ニ稱シテ曰堂ノ古色栗太第一ナリト村長曰中古本堂破
壞ニ依テ今此堂者支那郷。中村般若寺ニツ堂ノ其一ヲ
買得シテ斯ニ移スト。村中ニ言ヒ傳フルナリ。又此長押ノ裏ニ
其事モ記録シタル由ナリト依テ社中燭ヲ秉テ内陣ニ入。
之ヲ觀ルニ密々文字ヲ記シタルヤウナレトモ數百年。護摩
ヲ燒タル内陣ナレハ。緇サモ黒シ文字分明ナラス。或曰天井ノ
上ノ柱ニ。中村般若寺ト記シタルアリト云。按ニ買得シタルモ
明應六年ヨリ以前ノコナルヘシ如何トナレハ春日神社申樂
奉納ノコヲ録シタルハ明應六年ニハ斯ニ移シ来ルナラン

^{浄土宗}西光山往生寺

明應十年ノ建立

^{浄土宗}涌出山誓安寺

永祿九年二月朔日建立

^{真言宗}東方寺

^{眞言宗}大藏寺

右二箇寺俱ニ本尊藥師如來

天長年中弘法大師ノ開基ナリト云

岩屋山明王寺舊跡

大石東村ヨリ此村到ルノ道ノ傍ニ。信樂川ノ北岸ノ山上
ニ大磐石卓立セリ高サ十二三丈。廣サ三丈餘。中尊釈迦。

狹侍普賢。文珠。其下ニ不動尊ヲ彫刻ス其彫方今ノ石印ノ
白字ノ如シ
其ノ大サ四體ヲ以テ石面ニ充ツ。此磐石ノ下モト絶壁峻岨筆記
スル丁難シ。故ニ佛前膝ヲ容ルノ地ナシ。按ルニ寺号アレトモ。
原ヨリ寺ハナキナルヘシ。嗚呼浮屠氏。如何ナル足代ヲ作シ
テ。此彫刻ヲ成就セシマ奇妙ナル哉。漸ク山ヲ下リ河ヲ渡リテ
十町許。富川村ニ到リ村長ニ問テ曰何故ニ山屋山ト云フヤト
村長答テ曰彼佛ヲ刻スル岩ノ後ニ岩窟アリ壙ノ廣サ方一
丈餘。其入口ノ岩ニ文字二十許リ刻ス雨露ノ為ニ湮滅シテ
觀ル丁難シト云遺憾ニ不堪。然レトモ社中皆勞ル。故ヲ以テ
再来ヲ期シテ歸ル

笠神森

記曰土俗相傳フ山ノ神ナリト此森ノ下ニ小川アリ此川ヲ限
リ栗太。甲賀。二郡ノ界トス此川ヲ越セハ。桶井村ニテ甲賀
郡ナリ

南枝蒸茶

此村ノ名物ナリ

記曰此茶ヲ製スル丁他ノ茶ヨリモ早シ。蓋シ。南花初テ
開クノ意ニ因テ之ヲ号ツクルト云々

右栗太郡志草津人田中元郷所著其立言分郷標
邑其敘夏稽古徵今自封疆額田社祠梵刹以至動
植物產無所苟矣實經國之用也書既成今茲文政
辛巳六月十五日上之于藩府 公特賞其功勤
賜手書及眈服不亦榮乎且郡宰某氏等更所其副
本閱而考之而藩之封邑多係栗太郡則此志之在
府豈徒哉十一月十八日膳所戶田石秀記

一
本國而後之而繼之往也私東大瀨隈地志之亦
與卡書及知期不亦策乎且微罕其才幸更西其偏
辛正六月十五日正之亦書所
蘇湖氣無洲落支寶新國之用也書所則今為更延
通其錄更蘇古對今自陸縣歸田味其降如至體
古粟大隈志草新入田中六洲和書其立言公職然

田中貞昭者近江國中津人也彌適齋元鄉通稱平
右衛門世雖商賈好學而讓產於弟貞義編粟太志
書成而一者奉膳所候一者藏於家秘以不公于世
厭名聞也其學可識焉傳聞當時同志之者市河桂
介矢駒井脩輔北大駒井正策駒井中村文之進小
其餘數人助而與焉如今貞興貞義之養嗣而能保
其產業也今歲嘉永元戊申秋八月乞得家秘之原
本寫得畢

大抵其書其言其意

本意部

大路井平井信良誌

其義業也今湖海衣云功申林八日之林果味之原
 其補建人明而與高以今良與真處之奇臨而補
 介類補井前辭此六 補井五業此中林文之金
 類本間也其字可補高對開初和同去之昔市所林
 昔而而一昔奉部而一昔高次果味以不公下也
 本補門世舉商實技學而舉或然其良其補果太志
 田中負細香正五國州事人四補而示和並林平

明治十六年二月以滋賀縣奉騰馬子

原 滋賀縣管下迫江滋賀郡
草津村奥村孫十郎可藏

八

